

60399

教科書文庫

6
810
45-1949
01304 49658

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

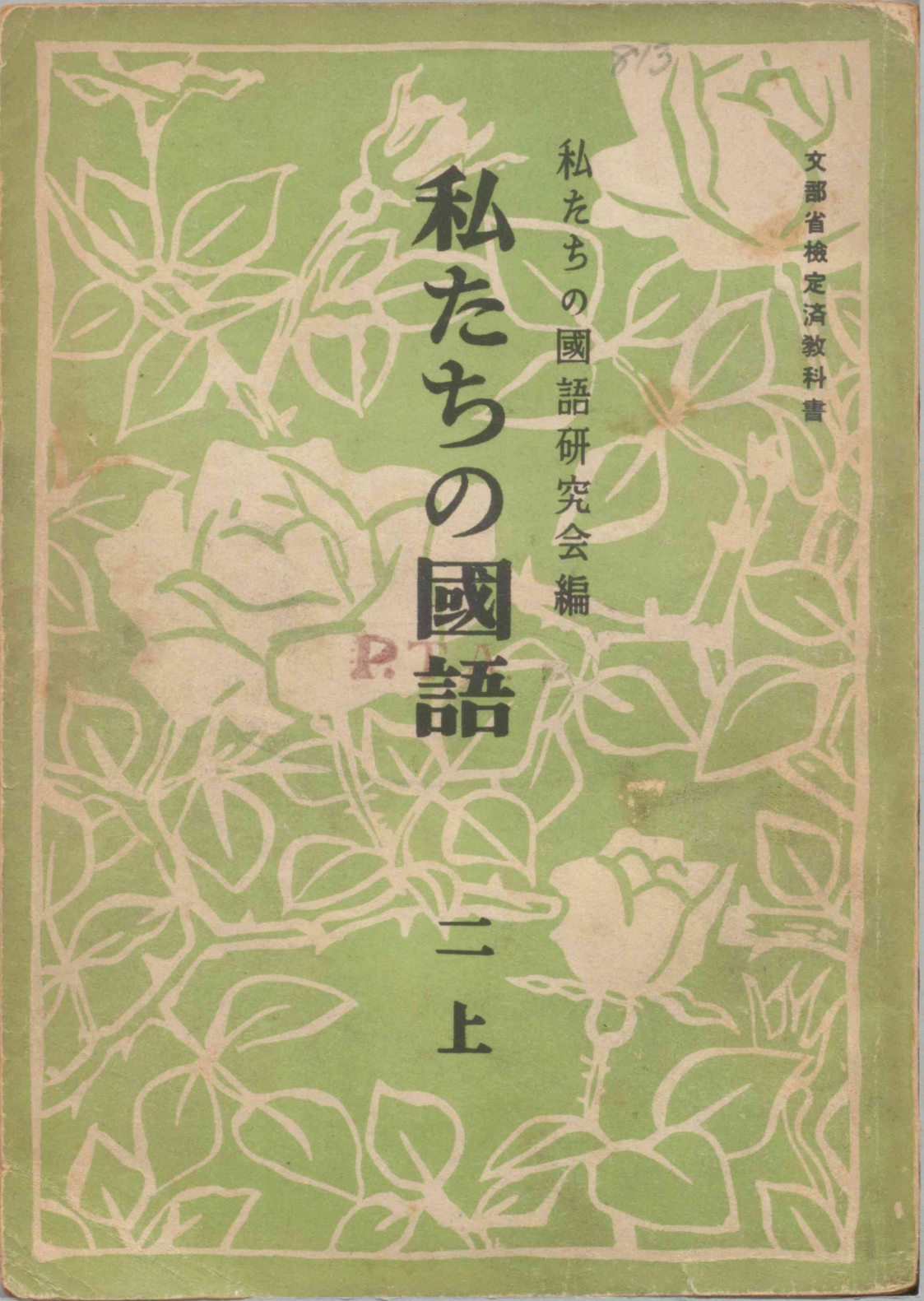
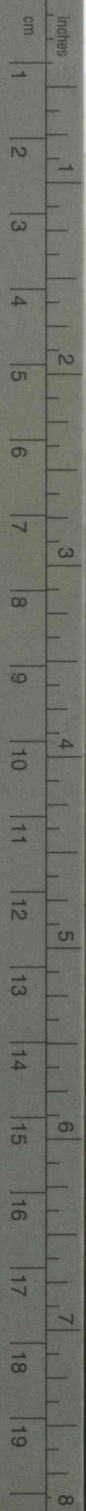


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省検定済教科書

私たちの國語研究会編

私たちの國語

11上

10

JAPAN 1 2 3 4 5

私たちの國語

二上

昭和二十四年十月十日
文部省檢定済
中学校國語科用



中央図書館

広島大学図書

0130449658





目次

一	見たまゝ感じたまゝ	一
〔一〕	詩の話	一
〔二〕	旅情	六
〔三〕	北海の朝	十五
〔四〕	幼年時代	十九
二	日々の反省	二十八
〔一〕	快活な世渡り	二十九
〔二〕	ふじの花ぶさ	三十四
〔三〕	ねずみの話	三十九
〔四〕	調味料について	五十一
〔五〕	トロッコ	五十六
三	文を解くかぎ	六十四
〔一〕	日本文と漢文	六十四

六六六

〔一〕 わかの浦	六十九
〔二〕 故郷の花	七十五
〔三〕 はぎ大名	七十八
四 文化と自然	八十六
〔一〕 ローマの秋	八十七
〔二〕 学者の苦心	九十
〔三〕 映画の歴史	九十三
〔四〕 文化と自然	九十八

一 見たま、感じたま、

ものを見ても、見方がにぶければ、また、見方が誤っていれば、正しく見ることはできない。われ／＼は、観察をもととして考え、行動する。もともとなる観察が、不十分であったり、まちがっていたりしたら、それこそたいへんである。ものを感ずる場合も、同様のことがいえる。すなわち行き届いた観察力と感受性とを養うことは、われ／＼の生活を豊かにまた深くしてゆくために欠くことのできないものである。

「詩の話」は、ものの見方、感じ方が詩にどう表わされるかを教えている。「旅情」は、旅に出たふたりの作者の異なった見聞と感想とを傳えている。「北海の朝」は、冬の夜明けと港の勇ましい出漁の姿とを描いて、余すところがない。「幼年時代」では、少年の生活や感情に直接触れることができる。

この作者たちにならって、われ／＼は、見たま、感じたま、を、そのままとらえることを学ぼう。

〔一〕 詩の話

大野 良子

このごろ、詩に興味を持つようになられたとのこと、それで詩というものについて、また敘景詩・抒情詩ということについても説明してほしいとのお手紙拜見しました。

一 見たま、感じたま、

それではまず、敘景詩・抒情詩ということからお話してみましよう。文章でも敘景文、抒情文と分類されることがあります。その場合、自然の風景や、所のありさまを見たまゝに書いたものが敘景文で、作者の思いを述べたものが抒情文です。しかし自由に書かれた文章というものは、その書いた人の主観を離れることはできないので、淡々たる自然の風景を敘しても、そこに採り入れられた個々の風物は、その時の、作者の心に映じた景色であります。このことは、同じ景色を見ても書く人によって違った味わいのものでできることでもわかります。

詩では、この個人個人によって異なる、ものの見方・感じ方、つまり主観の働きが文章の場合よりも更にいっそう強く表現されますから、敘景詩・抒情詩の区別は、その表現する時の心構えによってだいたいにきめられる分類だということになります。今、私の書いた「海草」という詩を例にとってみましよう。

海草

人の来ない磯の岩間にしげる海草は楽しそうだ

わかめ てんぐさ ほんだわら

名も知らぬ海草までがゆら／＼なびいて

小さな魚はその間を泳ぐ

青い空を透して海底の美しさ

さゝえが動く

うにの黒い針も動いている

じっと見ていると自分も小さな貝になって

底の砂に眠っているようだ

碎ける波の音もなく

ゆら／＼と水中に舞う

海草は楽しそうだ

これは、よく晴れた春の一日を、房州のある海岸に遊んだ時の作品です。

豊かな海の獲物に興ずる人たちの群れから離れて、なぎさづたいに、とある岩かどに上って休もうとした時、私はその岩の陰にたゞえられた水中の光景に、思わず見とれてしまいました。それはなんという静かな、美しい楽しい世界だったでしょう。廣さにして一坪にも足りず、水の深さも五尺には満たなかったでしょう。小さな水中の、楽しそうな生活、じっとのぞいていると、何もかも忘れてしまつて、遠くで騒いでいる人たちの声も聞えなくなつてしまいました。そしていつのまにか、楽しく生きている水中の植物や動物たちのなかまに、自分もはいつているような氣持になるのです。

なんでも幸福そうなものを見るのはうれしいものです。私はその時、楽しげな水中の生物たちの様

子を、この詩の第一節・第二節・第四節に敍したように、客観的にながめていたので、これだけであつたら、この詩は純粹に敍景詩と呼ばれるものだと思います。しかし、私は第三節で、もう自分がその光景の中に没入してしまつて、水底にうっとりと呼吸している小さな貝になつてしまつたようだと、自分の主観をそのままに書いてしまいました。こうなると、この詩の敍景の部分も、こうこつとした楽しい境地へ私を導くためのものであり、またその氣持を表現するための素材であつて、この一編の詩が語るうとするところのものは、その時の、私自身の幸福な思いにほかならないのですから、抒情詩といえるわけです。

ですから、敍景詩というのも抒情詩というのも、ある程度までの便宜上の分類であつて、敍景詩もまた、せんじつめれば、作者の感情を表わすものということになり、その本質において、抒情詩と一つであるということになります。

そうです。すべて詩というものは、その作者が物事に触れて深く感じた時、その心持を美しく表現したものです。詩と実用文との違いはこゝにあります。詩では用事を書いたり説明したりしません。何か教訓や主義・主張を持ったものも時にありますが、それが表面にあらわに見えていなければならないほど、詩の純粹なものとはいわれません。

詩になる心持は、偽りのない純粹なものでなければなりません。その詩を読んだ人が、何か眞実なもの、美しいものを感じるものでなければなりません。詩というものは、物事の美しさを感じるとその敏感な人が、その生活の中から、さまざま美しい思いをすくい取つてきて、文字につゞけてみせてくれるものだともいえます。

詩を書く者は、物事に触れて、自分の心に起るさまざまの感情を作品に盛り込みます。どうしたらこの感情を最も適確に表現することができるか、ということについて苦心します。たとえ美しい感情を歌つていても、表現がまずくは、よい詩とはいわれません。

そこで作者は、その場合の自分の氣持を表わすために最もふさわしいことばをさがし、またそのことばの持つ感じや響きや組み合わせや文字にまでも心を配り、さまざまの修辭上の技巧をこらしめます。表現したい内容が複雑微妙なものであればあるほど、読む人に伝えるための表現にはくふうがいるわけです。

しかし、もと／＼詩は心から生まれるものなのですから、詩の技巧や形だけができていても、それは無意味なものです。さまざまの美しいことばをつぎ合わせてみても、魂のある詩にはなりません。すぐれた詩は、その作者の歌おうとするその時の思いにひつたりあてはまつたよい表現の着物を着ています。そしてそれは私どもの心を豊かにしてくれまう。詩を読んで、作者のそこに表現しようとした心持がわかり、作者と同じ美しい感情を自分の中にも見いだすところ、詩を読む者の喜びでありましよう。

研究

一 敍景詩と抒情詩との違いについて、どう書かれてるか。

二 「海草」を熟読して、それから受ける感じを

書き、作者の解説と比較してみよ。

三 詩はどのようにして作られるか。

四 詩の味わい方について話しあおう。

〔二〕旅情

甲子温泉

深田 久彌

白河で降りたのが五時、まだ暗い。おそろしく寒い。セーターを出して着て、待合室のベンチに横になつたが、寒くて眠れるものではない。ようやく白んできたので駅前へ出てみると、寒いはずだ、すばらしい晴れ方で、西の空はるかに那須の連山があざやかに見える。

ぼくは甲子温泉へ行くつもりなので、駅前の、バスの系統図を屋根に大きく看板にした所へ行つて見ると、甲子行きというのはない。そこにいた人にきくと、それは鈴吾という自動車屋から出るという。その自動車屋をさがして、起きたばかりの白河の町に行く。一軒かじ屋があつて、ひげのはえたおやじさんが仕事場の穴に半身はいり、おかみさんとむすこらしいのが左右から金づちを振り上げて、三人でとんちんかん、とんちんかん火花を散らしている。その音が朝の澄んだ空気に響いて、こんな風景を見るのが全く久しぶりのせいにか、実にさわやかな氣持がした。

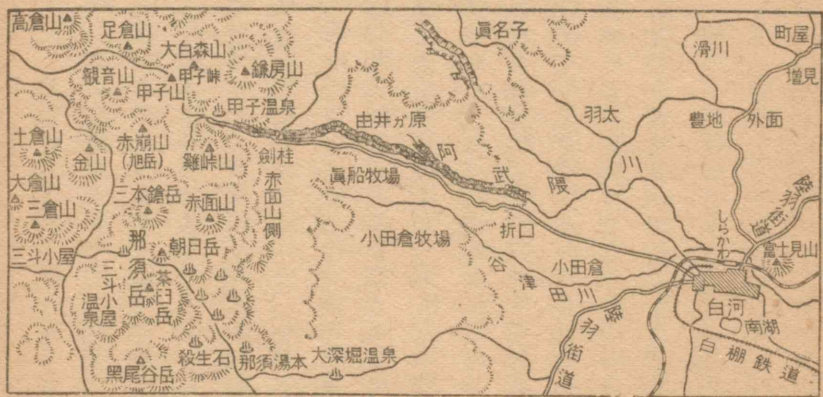
二、三できいてたずねあてた鈴吾自動車屋は、貧しそうな裏町で、そまつな車庫に古びたフォードが二台あるきり。まだ起きていないようなので、車のわきにリュックサックを置いて、そこからうしろの野へ出てみた。那須連山がよく見えるので、一々の峰を地図で確かめて、それから小川の橋に腰をおろして、駅で買って来た新聞を読んだ。

自動車屋へもどつてみると、出発は十時半だと言う。するとまだ三時間もある。しかたなくまた駅まで帰つて、どこか時間つぶしに見物する所がないか、駅前の観光協会の案内図を見る。秋風を吹く白河の関の跡まではだいぶある。南湖公園というのはよさそうだが、これも遠い。結局町のメイン・ストリートをぶらぶら歩いて、背後の友月山公園という丘にのぼつた。頂のあずまやのベンチで、朝飯がわりに買って来たまんじゅうを食う。ようやく日があがつて、暖かくなった。ゆうべは一時間とは眠らなかつたらう。新聞を顔にあててベンチに横になると、すぐ寝入つた。

鈴吾自動車屋へ行くと、主人らしいのがエンジンをなおしている。一時間ほど待たされて、十一時に出発した。客はぼくのほかに病身らしい若い女と、その弟に違いない小倉服を着た中学生のふたり。自動車はすぐ町を離れて、もう半分は刈り取られたたんぼの間を走る。

途中の折口という村で郵便屋さんに乗せて、それから道は次第にのぼりになる。のぼるに従つて那須の山々が大きく近くなつてきた。茶臼岳は肩からかすかに煙を吐いている。その右にとげ／＼した岩峰を見せた朝日岳、更にその右にゆつたり見た山容の三本槍岳と見ているうちに、やがて茶臼も朝日も大きな三本槍の裏に隠れてしまった。右手は阿武隈川だが、谷が落ちこんでいるので、流れは見えない。たゞ谷に沿つて木が茂っているの、それとわかるばかりである。その谷の向こう側に平坦な大きな原野の廣がっているのが見える所があつた。地図を見ると由井が原とある。沿道随一のみごととながめであつた。由井が原は、一面にくすんだようなたいしゃ色をしている。はなやかに紅葉する木がないからだろう。だがこういう紅葉のしかたもまた美しい。

種馬の放牧場とみえて、ところどころにさくがあるが、もう馬は見えない。相当のぼりつめてから、今度は急なくだり坂になつて、阿武隈川のほとりにおると、そこが終点の劍柱であつた。待合所があつて、もんぺをはいた若いおかみさんがお茶を出してくれた。



や、驚いたことには、そのおかみさんが、東京で流行している、後頭部にだらりと牛の舌のようにたれてそれに綱をかぶせた、あの髪をしている。

劍桂から甲子温泉まで約一里。道は阿武隈川の岸にくだったり、見おろすような高みにのぼったりの一高一低で、すでに紅葉の境である。

甲子温泉に着く。棒ぐいの門をはいると、両側に見すばらしい長屋が続いている。これが夏に自炊湯治客で満員になる客舎だとわかったが、それにしてもきたなすぎる。旅館の方はいくらかまじだが、それでも破れたちんばのスリッパをはかせられて通された「すぎの一番」は、おせじにもお座敷とは申しがたい。だがぼくの注文で、一番いい客室だと見えて、二方あけ放ったかどべやで、眼下が阿武隈川の流れ、対岸は紅葉した山でその山かけから炭を焼くらしい煙がのぼっている。歌人なら歌でも考えるところだろうが、無能のぼくはしよぎないから湯へはいりに行く。

湯は、外へ出て坂をくだって、橋を渡った所にある。七間に三間もあるうか、プールのような大きな浴場で、なみ／＼と湯があふれている。夏向きにすっかり窓が取り拂ってあるので、浸りな

がら、紅葉が鑑賞できる。湯の外はすぐ谷川である。

翌朝六時に起きるなり、ふるに行く。廣い湯にやはりだれもない。朝飯をすまして八時に出発する。こゝから甲子峠を越え、更に小峠、中峠、大峠と越えて、那須の裏の三斗小屋温泉へ出るのは、なか／＼よい秋の旅なのだ。時日の余裕がないので、きょうは赤崩山（会津のこちら側では旭岳と呼んでいる。）に登るつもりなのだ。

カメラと水筒ときのう食べ残したまんじゅうだけの身軽さで出かける。宿のすぐ上手で阿武隈川は二つに分かれる。東北屈指の大川も、こゝまでさかのぼると、徒歩でも渡れる細流である。その二つの谷川にわかつ尾根に道が通じている。地図で見ると高距四百メートルの急傾斜だが、非常にゆつたりしたいなずま形に道が作られているので、登るのに少しもほねがおれない。ずっと紅葉した潤葉樹の下道を行く。

白河樂翁の「関の秋風」の中の「白河に至りて甲子の山を見ざらんは、孔子の門を過ぎて入らざるごとし。甲子の山に至りて山の紅葉を見ざらんは、堂に入りて室に入らざるごとし。もみぢのくれなゐ水の白たへよりしてうんぬん」という文章を読んでいたから、こゝのもみぢに期待していた。あまり期待が大き過ぎたせいかな、なんだか今見る程度の紅葉ではあきたらない。山の秋には、もっと驚くようなもみぢの景色があったはずだが、と思いつゝ行く。

一時間ほどでいなずま形に登り盡くして、猿が鼻と称する地点に出る。それから先はだら／＼のぼりの平坦な尾根道である。木が低くなったので見晴らしがきく。左の谷を隔て、向こうは三本槍岳だが、これはあまり山の横が大きすぎて、独立した一つの山という感じを與えない。それに比べると、

正面の赤崩山がはるかにりっぱだ。谷から直ちにそり立っていて、峰の方はいかめしい岩で包まれている。その毅然とした形がいい。本格的である。右手の谷の向こうには、こんもりと樹木であふわられた大白森(一六五六メートル)の丸い峰。

やがて甲子峠へ行く道と分かれて、ぼくは甲子山(一五四九メートル)に登った。分かれ道から二十分もかゝらない小さな瘤山である。だがその頂上に立ったながめはなか／＼よかった。見渡す山がすべて濃い茶かっ色のじゅうたんをひろげたようである。紅葉する木と針葉樹とが入りまじっているから、そう見えるのであろう。

そのながめに満足してから、さて目ざす赤崩山に向かつていったん鞍部へくだる。はねるように足の運ぶ急な坂である。その鞍部はやゝ廣いたいらになっていて、もう葉を落し盡くしたぶな林がある。そのほかは一面の青々としたさゝ原である。それからぶな林のかたわらにきつね色に枯れかけた小灌木のくさむらが廣がっている。ちょっといい所だ。どんなふうにも写真をとろうかと、立ちどまってしまうがめていた時である。ふと小灌木のくさむらに目が行くと、その枯れ葉の間に、顔をのぞかせているものがある。くまである。顔の目鼻だちまではっきり見えたから、三十メートルとは離れていなかっただろう。

顔を見合わせていた、と思うまに、くまはくるりと向こうむきになって、がさ／＼と大きな枯れ葉の音を立てて、ちょうど黒いまりがはずむように、くさむらの中を逃げて行った。見たところ子ぐまだった。

ぼくもまた甲子山の方へ逃げ出した。甲子山の中腹ぐらゐまで登り、まず安心と思つて、そこに腰

をおろし、くまの出たくさむらを見つめながら、思索にふけた。

さてどうしようかと考えたのである。せつかくこゝまで来て引返すのは、はなはだ残念である。

赤崩山は目の前に立っている。あと三百メートルぐらゐのぼりだから、一時間とはかゝるまい。登り道は一つの岩稜が出ていから、あそこをたどればわけないだろう。この山はめったに人の登ったことのない山である。この機会をのがしては、いつまた登れるかわからない。あの頂上に立てば、奥日光から会津にかけての山々が一望に見渡せるはずである。よし、行こう。

だが、と、また考える。くまである。今逃げて行ったのは子ぐまだったから、どこか近くに家族がいるに違いない。子ぐまはさっそく報告するだろう。

「かあちゃん、今そこに人間がいたよ。」

「そうかい。」

すると横から父親が、

「まあ、人間には手出ししない方がいいよ。」

まずそれで無事である。ところがだ、赤崩山へ登る岩稜はむき出しで、ぼくの登って行く姿は始終下から見える。くまが思いなおしてかゝってくるかもしれない。

あゝ、そうなら。

決定に迷つて、だいぶん長い間、ぼくはそこで思慮をめぐらしていた。そしてついに、次のような結論を案じ出して、退却することにした。百中九十九までくまの方はだいじょうぶだろう。今までくまにやられたという登山者の話を聞いたことがない。くまの方が逃げるにきまつている。しか

し、それかといつて、不安は消えはしない。これからあのくさむらの続きの中を通過して、むき出しの岩稜を通過して、それから再び同じ道を引き返す。その間じゅう、ぼくは不安のためびく／＼していなければならぬだろう。そんなにびく／＼しながらでは、山登りの楽しみも何もあつたものではな
らう。

現に、今横で、がさつと音がしても、びくりとする。こんなことではゆっくり山を見ることもでき
ない。

二十年山歩きをしているが、くまのため追い返されたのはこれがはじめてであつた。甲子山までも
どり、帰りは速かつた。いなずま形の山道につきものの近道近道をあさつて、飛ぶようにかけくだつ
た。温泉までもどり着くと、急げばまだ自動車にまにあうというので、玄関に置いたリュックサック
を引かつつと、すぐまた劍柱の方へ歩きだした。

(雑誌「文学界」)

霧

藤 沢 桓 夫

動いている汽車の中で、私はぼんやり窓の外を見ていた。旅に出る楽しさはほとんどなかつた。小
さなかばんの中に詰めこんで來ている空白の原稿紙のことを考えると、私の心はかえつて重かつた。

窓の外に木津川の青い静かなうねりが見えだすと、しかし私の心はいくらか慰んだ。昔から私は流
れている水を見るのが好きである。流れている水というものは、その色や姿も美しいが、そこに長い
時間の姿の見えるのが私には何よりも快いのだ。水は、太古の思想や山や川の喜びや悲しみを今なお
傳えながら、静かにさようからあすへと流れている。水をながめていると、私の心には人間の歴史や

運命についてのさまざまの思いが、あとからあとからわいてくるのだ。

私が伊勢の山の中のその温泉宿に着いたのは、晝過ぎの一時ごろだつた。

山ではひぐらしがかな／＼と鳴いていた。

宿の方へ、白い大きな岩石の多い谷に沿つて、すぎ林を登つて行くと、山氣が膚に迫つた。ひぐら
しの澄んだ哀調を帯びた声は、私にはじめて都会から離れて來たことを思わせた。

宿の私のへやは二階だつた。下を溪音が走っていた。縁に出ると、傾斜の急な青葉の山膚が幾重に
も私を囲んでいた。近くの山膚のある部分にさしている日の色は暑かつた。

着いて三十分ほどすると、急にしぐれが襲つて來た。山々の緑の色が次第に重く濃いものに変わ
り、やがて、それらをけむらせるほど雨ははげしくなつた。ひぐらしはいつか鳴きやんでいった。少し
寒いくらいの冷氣がへやの中に流れこんできた。

夕方近くしぐれはやんだ。その前ごろから、白い霧が、向こうの谷の間からわき、遠くの峰を隠し
て静かに動きだしていた。ひぐらしが、今度は一匹だけ、遠慮したような声で鳴きだした。

夜になると、また雨だつた。そして、その雨は、翌日も、翌々日も、ほとんど一日じゅう降り続い
た。つゆのようなじめ／＼さはなく、どこかもつとしつこいきびしさで、時には夕立ちのように白く
強く弱く降つた。

そして、雨の間じゅう、向こうの谷を霧が動いていた。遠くの峰を隠したり、ぼかした墨絵にした
り、淡彩の水絵にしたりして、静かに動いていた。

雨は私を退屈させた。晴れていたところで、宿の附近の坂道を少し歩くくらいで、ほとんど一日じゅ

うへやの中にいるのだが、しかし、降り続くと、全く私はうんざりした。私は、かぜをひかぬように膚着を重ね、仕事に疲れると、ペンを置いて、一日じゅうあけ放してある縁から、霧の動きをなかめた。そして、たばこの吸いながら谷に投げた。

雨のやつとやんだことを私に気づかせたのは霧だった。夜の八時ごろだった。ふと気がつくと、浴室の湯げのような白いものが縁からもう／＼とへやの中に流れこんで来ていた。電燈の灯に透かして見ると、煙のような水蒸気——みじんの水玉がへやいっぱいにならず巻いていた。気のせいばかりではなく、ゆかたの肩のあたりはじつと降りていた。

私は障子をしめるために立ちあがった。

戸外は、木々の姿も夜の山々も何も見えず、たゞ一面の白さだった。

ふと見おろすと、真下のがけの小道のところ、裸の電燈が一本ともっていた。その灯は、霧の中で、半径一尺ほどの鮮明な丸い光のかさになって、ぼうとまた／＼いていた。なんともいえぬ澄んだ美しい色だった。

私は障子をしめるのも忘れ、その灯の色を見ていた。

(大阪手帖)

研究

- 一 地図によつて、「甲子温泉」の作者がたどつたコースを話しあおう。
- 二 右の作者の見た、山・川・原等の名をあげ

- よ。その中で作者が美しいと感じたなごめを抜き出してみよう。
- 三 最後に子ぐまに会い、作者の不安を描いた

箇所は、全体の文の調子とびつたり合うか。

四 「秋風ぞ吹く」の和歌と、「関の秋風」から引用された文章の意味を調べてみよう。

五 「霧」の作者は、水を見て何を感じたか。

六 「霧」の作者に旅情を起させた風物として、

どんなものがあげられているか。その効果がど

のようにあがっているかを考えてみよう。

七 この二つの文を次の点で比較しよう。

- (1) 作者の旅の動機 (2) 場所 (3) 季節 (4) 旅の気分 (5) 文の書き出し (6) 文全体から受ける印象

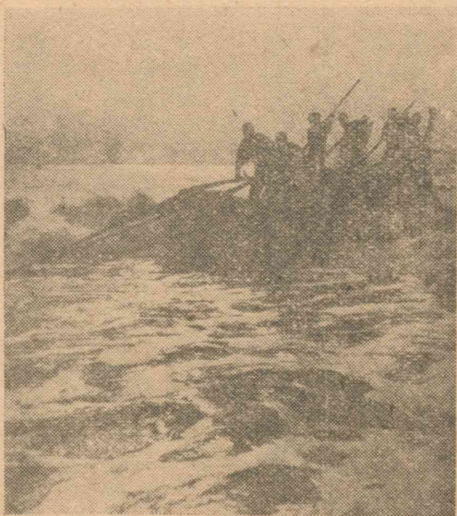
〔三〕 北海の朝

有島 武郎

長い冬の夜はまだ明けない。雷電峠と反対の湾の一角から長く突き出た造りぞねの防波堤は、大蛇のむくろのようななまっ黒い姿を遠く海の面に横たえて、夜目にも白く見える波濤のきばが、小やみもなくその胸腹に食いかゝっている。砂浜にもやわれた百そう近い大和船は、へさきを沖の方へ向けて互にしがみつきながら、長い帆柱を左右前後に振り立てている。そのそばに、さまざまの漁具と弁当のおひつとを持って集まって来た漁夫たちは、ことば少なにもを言いかわしながら、防波堤の上に建てられた、天気予報の信号燈を見やっている。暗いやみの中に、白と赤との二つの火が、夜鳥の目のようにざらりと光っている。赤と白との二つ球は、危険警戒を標示する信号だ。船を出すには、一番鐘が鳴きわたる時刻まで待たなければならぬ。町の方は寝しずまって、あかり一つ見えない。それらのすべてをふゝいくるめて凍った雲は、幕のように空低くかゝっている。音を立てないばかりに、雲は、山の方から沖の方へと絶えまなく走り続ける。みぎわまで雪に埋まった海岸には、見わた

せる限り、白波がざぶんざぶん碎けて、風が——空氣そのものをつさらつてしまひ、その激しい寒い風が、雪に閉ざされた山を吹き、漁夫を吹き、海を吹きまくって、まっしぐらに水と空との閉じ目を目掛けて突き抜けて行く。

出 漁



漁夫たちの群れから少し離れて、一かたまりになったおかみさんたちの背中から、赤子の激しい泣き声が起る。しばらくしてそれがしずまると、風の生み出す音の高い不思議な沈黙が、また、天と地とにみなきり満ちる。

二時間もたつたと思うころ、あや目も知れないやみの中から、硫黄が岳の山頂——右肩をそびやかして、左をなで肩にした——が、雲の産んだ鬼子のように、空中に現われ出る。鈍い土がまだ振り向きもしないうちに、空はいち早くも曉の光を吸いはじめたのだ。

模範船（港内に四、五そうあるのだが、船も大きいし、それに老練な漁夫が乗りこんでいて、ほかの船にかけ引き進退のあいずをする。）の船頭が頭を集めて相談をしはじめると、どことも知れず、晝にはけうとい羽色を持ったからすの音が、勇ましく聞えだす。漁夫たちの群れもおかみさんたちのかたまりも、石のような不動の沈黙から急に生き返って来る。

「出すべ。」

そのさゞめきの中に、潮でさびきつた老船頭の幅の廣い塩辛声が、高くこう響く。

漁夫たちは力強い鈍さをもって、互に今まで立ちつくしていた所を歩み離れて、めい／＼の持ち場につく。おかみさんたちは右に左に、夫や兄を介抱してかけ歩く。今まで陶醉したようにたわいもなく波に揺られていた船のともには、漁夫たちがひざがしらまで水につかつて、わめきはじめる。のしり騒ぐ声かひとしきり聞えたとと思うと、船はよんどころなさそうに、右に左に揺らぎながら、船首を高くもたげて波頭を切り開き切り開き、狂い荒れる波打ちぎわから離れて行く。最後の高いのしり声とともに、今までの鈍さに似ず、あらゆる漁夫はましろのように船の上に飛び乗っている。ともするとへさを岸に向けようとす船の中からは、長いさおが水の中に幾本も突きこまれる。船はやむを得ずまた立ちなおって沖を目指す。

この出船の時の人々の氣組み働きは、だれにでも激烈なアレグロで終る音樂の一片を思い起さずだろ。がや／＼と騒ぐ聴衆のような雲や波の擾乱の中から、漁夫たちの鈍い *largo pianissimo* ともうべき運動が起って、それが、はじめのうちは周囲の騒音の中に消されているけれども、だん／＼と熱情的となり力づいていって、靈を得たように、漁夫の乗りこんだ船が波を切り波を切り、だん／＼と早くなる一定のテンポを取って沖に乗り出して行くさまは、力強い樂手の手で思うぞんぶん大胆にかなでられる *allegro molto* を思い出さずにはおかぬだろう。すべてのものの緊張したそこには、いつでも音樂が生まれるものと見える。

船はもう一個の敏活な生き物だ。船べりからはむかでのようにろの足を出し、ともからは鯨のようにかしの尾を出して、あのもの悲しい北國特有な漁夫のかけ声に励まされながら、まっ暗に襲いかゝる波

のしづきをしのぎ分けて、沖へ／＼と岸を遠ざかって行く。海岸に一かたまりになって船を見送る女たちの群れは、もう命のない黒い石ころのようにしか見えぬ。漁夫たちはるをこぎながら、帆綱を整えながら、あかをくみ出しながら、その黒い石ころと、模範船のともから、一の字を引いて怪火のように流れる炭火の火の子とをながめやる。長い鉄の夾ばしに、火のおこった炭をはさんで高く上げると、それが風をくって盛んに火の子を飛ばすのだ。すべての船は始終それを目あてにして進退しなければならぬ。炭火が一つ上げられた時には、天候の悪くなるしと見て船をとめ、二つ上げられた時には安全になったしとして再び進まねばならぬのだ。曉闇を、もの／＼しく立ち騒ぐ風と波との中に、海面低く火花を散らしながら青いほのおを放って、燃え上がり燃えかすれるその光は、幾百人の漁夫たちの命を支配する運命の手だ。その光が運命のものすごさをもつて、海の上に長く尾を引きながら消えて行く。

どこからともなく海鳥の群れが、白く長い翼に羽音を立てて風を切りながら、船の上に現われて来る。ねこのような声で小さく呼びかわすこの海のさばくの漂浪者は、さつと落ちて来て波に腹をなでさせるかと思うと、翼を返して高く舞い上がり、やゝしばらく風にさからって、じつとこたえてから、思いなおしたように打ち連れて、小気味よく風に流されて行く。その白い羽がある瞬間には明かるく、ある瞬間には暗く見えだすと、長い北國の夜もようやく明けはなれていこうとするのだ。夜のやみは暗く濃く沖の方に追いつめられて、東の空には黎明の新しい光が雲を破りはじめる。ものすさまじい朝焼けだ。あやまって海に落ちこんだ悪魔が、肉つきのいい右の肩だけを波の上に現わしている。その肩のような雷電峠の絶巔を、なでたりたゝいたりしてむら立ち急ぐ嵐雲は、炉に投げ入れられた紫のような光に燃えて、山ふところの雪までも透明なふじ色に染めてしまう。それにしても、明け方のこの暖かい光の色に比べて、なんとという寒い空の風だ。長い夜のために冷えきった地球は、今その一番冷たい呼吸を呼吸しているのだ。

(生れ出づる悩み)

研究

- 一 一 ―― が幾つ使われているか。その用法を調べてみよう。
- 二 「呼吸を呼吸してゐる。」という言ひ方は、一般には用いられない。この言ひ方をどう思うか。
- 三 「暗いやみの中に、白と赤との二つの火が、夜鳥の目のようにざらりと光っている。」という文の中で、「夜鳥の目のように」以下は、信号燈を夜

- 鳥の目にたとえていのであるが、こうした比喩をほかにさがして、その適不適を話しあおう。
- 四 外國語を、*largo pianissimo*, *allegro molto* と外國語のまま文章にまぜると、「ラルゴーピアノニッサモ」「アレグロモルト」と、かたかなで書くのと、どちらが日本文によく調和するか。
- 五 自分が経験した、風の時のことを書いてみよう。

〔四〕 幼年時代

中 勘 助

「私」は、東京の神田で生まれた。母が弱かったため、そのころ家に來ていたおばさんに育てられた。内氣な「私」は、氣性の荒い神田の子供たちとは口をきくこともできなかつたが、小石川の高台に引越してからはじめて遊び友だちを持つようになった。これは、「私」が、學校にあがる少し前のことである。

このへんの子は神田のわんぱくどもに比べればさすがに穏やかだし、それに往來は静かだし、私の

ような者にとつては、まことにくつきょうな世界であつた。で、おばさんはいっしょうけんめい私の遊びななまによさそうな子供をさがしてくれたが、そのうち見つかつたのは、お向こうのお國さんという女の子であつた。おばさんは、いつのまにかお國さんがおとなしいことを聞き出して、もつてこのお友だちだと思つたのである。ある日おばさんは私をおぶつてお國さんたちの遊んでいる門内のあき地へ連れて行って、

「ええお子だに、遊んだつてちようだいも。」

と言いながらいやがる私をそこへおろした。みんなはちょっとしらけて見えたがじきにまた元氣よく遊びはじめた。私はその日はお目見えだけにして、おばさんのたもにつかまつて、しばらくそれをながめて歸つた。その翌日も連れて行かれた。そんなにして三日四日たつうちに、お互にいづらかおなじみがついて、向こうで何かおかしいことがあつて笑つたりすれば、こちらもちよいとえがおを見せるようになった。お國さんたちはいつも「れんげの花ひいらいた」をやつてゐる。おばさんはそれからうちで根氣よくその歌を教えて下げいこをやらせ、それがりつぱにできるようになってから、ある日また私をお向こうの門内へ連れて行つた。そうしていじけるのをむりやりにお國さんの隣へすわりこませたが、いくじのないふたりはきまり悪がつて手を出さないで、おばさんは何かとじょうずにだましながら、ふたりの手を引き寄せて手のひらを重ね、指を曲げさせて上からぎゅつと握つてようやく手をつながした。これまでついぞ人に手などとられたことのない私は、なんだかこわいような氣がして、それにおばさんに逃げられやしなやかという心配もあるし、おばさんの方ばかり見ていた。新たにこの調和しがたい新参加者が加わつたために、子供たちはすっかり興をさまされて、いつまでたつ

てもまわりはじめない。それを見てとつたおばさんは、輪の中へはいつて景氣よく手をたゝいて、

「あ、ひいらいた、ひいらいた、なんの花ひいらいた。」

と歌いながら、足拍子を踏んでまわつてみせた。子供たちはいつかつりこまれて小声に歌いだしたので、私もおばさんに促されて、みんなの顔を見まわしながらいしよで歌のあとについた。

「ひいらいた、ひいらいた、なんの花ひいらいた、れんげの花ひいらいた……。」

小さな輪がそろ／＼まわりはじめたのを見て、おばさんはすかさずはやし立てる。歌の聲がだんだん高くなつて輪がだん／＼速くまわつてくる。平生ろくに歩いたこともない私は、どうきがして目がまわりそうなのでもう手を放したいのだが、みんなは夢中になつてぐん／＼人を引きずりまわす。そのうちに

「ひいらいたと思つたら、やつとこさとつうぼんだ。」

と言つて子供たちはおばさんのまわりへ、いちどきにつぼんでいったものでおばさんは、

「あやまつた、あやまつた。」

と言つて輪から抜け出した。

「つうぼんだ、つうぼんだ、なんの花つうぼんだ、れんげの花つうぼんだ……。」

つないだまゝ突き出してる手を拍子につれて揺りながら歌う。

「つうぼんだと思つたら、やつとこさとひいらいた。」

つぼんでたれんげの花はぱつと開いて、私の腕は抜けるほど両方へ引つ張られる。五、六べんそんなことをやるうちに、慣れない運動と氣疲れとでへと／＼にくたびれちまつて、おばさんに手をほど

いてもらって家へ帰った。

お國さんはお友だちというものの最初の人であった。はじめのうちは私もおばさんがそばについていなければ遊べなかったし、おばさんはいわばぼつと出の子供の身の上を氣づかってそばを離れなかったが、こゝは神田へんとは違って、全く私みたいな子のための世界といつてもいいくらい静かな安全な所であることを見届けて、車が來たら門の内へはいれの、みぞのはたへは寄るのと、細かい注意をくどくどと言ひ聞かせた後、ひとりおいて帰るようになった。

ふたりがさし向かいになった時に、お國さんは子供どうしが近づきになる時の礼式に従つて、父の名、母の名からこちらの生年月日まで尋ねた。そして「何の年だ。」と言つたから、おとなしく「何の年だ。」と答えた。

「あたしも何の年だからなかよくしましょう。」

と言つて、いっしょに「こけっこっこ、こけっこっこ。」と言ひながらたもとで羽ばたきをして歩いた。おない年は何がなしうれしくなつかしいものである。お國さんはまた、家の者が自分のことをやせっぽちだのかゞんぼだのと言つてこぼしたが、私もみんなにたこぼうずと言われるのがくやしかつたので、心から、お友だちの身の上の同情した。いろ／＼話あつてみれば、一々意見が一致して、私たちはまもなくなよしになつてしまつた。お國さんは浅黒くやせた鼻の高い子で、前髪をさげて赤いきれでおさげの根をゆわえていた。

ふたりは虫食いだらけの門柱に寄りかゝつたり、しゃがんでどろいじりをしたりして頭がくつきあうほど顔を寄せながら、さのう何本めの歯が抜けたとか、どの指へとげをたてたとか、うちもない

ことをしゃべりあつて、お互に意氣投合すればなんということもなく「あは、あは、あは。」と笑う。お國さんはたしか糸切り歯が一本抜けて、笑うたんびにそこがほらあなみたいに見えた。うちでおばさんばかりを相手にしていた私は、お國さんと友だちになつてからよいこと、悪いこと、急に知恵がついてきたけれど、おない年とはいえよつぽと遅れていたもので、なんでも言うことをきいて遊んでいた。

近所にお峰ちゃんといつて私たちより一つ年上の子がいた。お峰ちゃんはいじわるなばかりか、いどいやくもちやくで、みんなにきらわられていたが、毎日顔を合らすので、子供どうしのつきあいで、時にはどうしてもいっしょに遊ばなければならぬことがあつた。ある日のこと、またお國さんと年の話が出て、「こけっこっこ、こけっこっこ。」と言つて羽ばたきをしていたら、お峰ちゃんは、

「あたしさるの年だから。」

と言つてきやつきやつとふたりをひつかいた。

お國さんのくしは、赤く塗つて、菊の花のまき絵がしてあつた。緋と水色のちりめんをこしらへたくす玉のかんざしも持つていた。お國さんは何か新しいものを買つてもらうと自慢して見せておきながら、よく見ようとすれば、たもとへ隠したりして人をじらせる。私はそんなものを見るたんびに、自分か女に生まれなかつたことをくやみ、また男はなぜ女みたいにきれいにしないのだろうと思つた。

お國さんはかくれんぼをしようとする時はいつでも、「さのう裏のやぶから三つ目小僧が出た。」の、「山かゞしがとぐるを巻いていた。」のとあどかしておいて、ひとをすもゝの木陰に目をつぶらせてどこかへ隠れてしまふ。私は家をぐるりと一まわりして裏の方へさがしに行く。お庭へ曲がる所に竹矢來をしてがちょうが二羽飼つてあるのがこわくてしようがない。そうと通ろうとするのをえびす

様の冠みたいな顔をのしあげてがわ／＼追って来る。やっとの思いでそこを通り抜けて、茶畑の方へ行くと、隣の乳牛が囲いの上から首を伸ばして、「めえ。」と言う。それがこわいので茶畑の中はいいかげんにしてお庭をさがす。大きな木がたくさんあるのでなか／＼見つからない。あたりを見まわしてもだれもいないし、帰り道には牛と、がちょうが待ちかまえているし、心細くなって、

「もういいかあ。」

と呼んでみる。しんかんとしているところへ自分の声ばかり響いてなんにも聞えない。お國さんはひとをだましてどこかへ行ってしまったのじゃないかなどと思えばなお／＼さびしくなって、早くおばさんが迎いに来ればいいのにと思いながらまた、

「もういいかあ。」

と呼んでみる。われながら涙声になっている。そうすると竹やぶのへんで

「もよ。」

と小さな声で言う。いるなと思つて竹やぶの入口まではいつても、かき一重向こうにはお寺のいぢょうの木がまっ黒に立っているし、竹の間にはつばきやさいかちがごちゃごちゃに茂つて、いやにうす暗い。三つ目小僧が出たというのはほんとかしらなどと思つて立ちすくんでいると、奥の方でくすくすと笑い声がする。で、ようやく元氣づいてはいつて行くのだが、竹の切り株や根っこがいたるところ出ている上に痛い／＼草が一面にはえているのが、ふだん石ころ一つにもおばさんがやかましく世話やいてくれる私には、針の山を行く氣持で足の踏みどころもない。おまけにんだかそこらじゅう山かゞしがとぐるを巻いているような氣かして氣味が悪くてならないのを、やっとの思いで一足ずつ踏

みこんでついでいよ／＼見つかりそうなとこまで行くと、お國さんはすみの暗い所から、

「おばけえ。」

と言つて白目をして出て来る。それをお國さんだとは知りながら総毛立つて、

「しやだつてば、いやだつてば。」

と逃げだすのを、おもしろがつてどこまでも追つかけて来る。そこでこんだはこつちが隠れる番になる。けれども私はやぶの中へは隠れえないし、それにさきは案内をよく知っているのでじきに見つかつてしまう。でもどうかしてなか／＼さがせないとお國さんは家へあがつてお菓子を食べているのを、それとは知らずいくら待つていても来ないので、

「もうよし夜があけた。」

と言つて出て行くと、

「ほら見つけた。」

とむにゃむにゃやりながら出て来て、

「あなたにも一つあげましょう。」

と言つて金華糖のかけらなどくれる。

私たちは写し絵が大好きであった。その油くさいにおいをかぐ時の氣持はない。「早くついた方が勝ちだ。」と言つてはった上へ、べと／＼につばをつけて、

「早くくつつけ、早くくつつけ。」

と言いなから指でこすつてゐる。いろんな色の鳥や獸などの押された手の甲を並べて、いたずらに皮

を伸ばしたり縮めたりするのがおもしろい。少したつとかわいてかゆくなるのを、そうとまわりをかいたりしてこらえている。時にはおそろいの絵を二の腕にはって、「いつまでもととさっこだ。」と言って着物にすれないように大事にしているが、あくる朝見ると切れぐにになって、わけのわからないものになっている。朝飯をすますやいなや、恐る／＼お國さんのとこへ行つて、

「こんなになつたからかんにんして。」

と言えば、わざとつんとしてこれ見よがしにそでをまくつて見せる。と、やっぱしめちやくちやになつてゐるのを丸くして、

「あた のもこんなになつちやつた。」

と言つてもおかしそうに笑う。

櫻の花の散るころには、花びらを糸にぬいて数の多いのを競う。

春になると、お儒者のような玄関の前にあるあんずの木が雲のように花をつけ、その青白い花がまばゆく日に照らされて、すうんとしたかおりがあたりになゞよう。近所の子供たちはみんなその陰へ寄つて來てゐるんな遊びをする。かれらの声が聞えると、おばさんは私を連れてつてみんなに耳うちをして歸つて行く。かれらはみんな三つ、四つ年上であつたが、子ぼんのうなおばさんになつて、

「□ちゃんとおばさん、□ちゃんとおばさん。」と言ふようになり、自然、私をかばつてよく遊んでくれ、子供らしい世話もやいてくれた。おかしなことに、かれらは私よりずっと大きいくせに、何をやつてもじきに負かされてしまふ。鬼ごつこをすればだれも私をつかまえないし、こまをまわせばだれのも不思議に当たらない。そしてなにがなんだかわからずにこちらが勝つてしまふ。家へ

歸つて鼻を高くして話すと、みんなは、「えらい、えらい。」と言つてほめた。このぼんやりが、自分のみそつかすにされているのに氣がつくのは、容易なことではなかつた。

お國さんのおとう様は、骨格のたくましいこわい人で、お役のため留守がちであつたが、たまに家の時はいちんち二階に閉じこもつて、何か書きものをしていた。そうして少しやかましくするとじきにしかられるので、こちらもおとう様のいる日には遊びに行かなかつたし、向こうも家に小さくなつていた。どうかしてそれを知らずに行つて、

「お國さん、お遊びなさいな。」

と呼ぶと、お國さんは玄関の障子を細めにあけて、親指を鼻の先へ出して、さもこわそうに手を振つてみせる。

桃のお節句に、お國さんのとこへよばれたことがあつた。日あたりのいいお座敷の正面に高くひな段をこしらえて、りっぱなおひな様が飾つてあつた。うちのは目にはいりそうなおひなのだのに、お國さんのはその五つがけもある。おひな様は生きてゐるものとばかり思つていた私はからだがつくむような氣がして、幾つも続けざまにおじぎをしたらみんながどつと笑つた。そこへ意外にも留守だと思つていたおとう様が出て來たので、どうなることかと思つておひな様とおとう様の顔を見比べながら、今にもべそをかきそうにちぢこまつていた。おとう様はいじけてゐる私を見て、いつになく笑いなから豆いりを紙に包んでくれて、「年は幾つ。」だの「名はなんというの。」といふんなことを聞いた。そして、

「こゝにゐる人の中でだれが一番こわい。」

と言ったから、正直におとう様を指さしたらみんながまたどつと笑った。おとう様も笑いながら、「おとなしくさえすればしかりはしなす。」
と言つて二階へ行つてしまつたので、ようやくほつと息をついた。
(銀の匙)

研究

- 一 この文章の中から、子供の遊戯を列挙せよ。
- 二 「私」とお國さんと、どういう点で共通し、またどういふ点で違つているか。
- 三 大意を二百字以内で書け。
- 四 十二支をあげよ。

二 日々の反省

われ／＼は毎日毎日さまざま／＼なことを行い、見たり感じたりする。しかしそういう行爲や経験を自ら省みることなしに積み重ねてゆくことは、はなはだ危険である。自分のしたことがよいか悪いか、一日の経験が何を教えるかを、反省し正しく考へて、あすのために備へなければならぬ。食物が、よくかまなければからだに必ずしも有益でないのと同じように、行爲も経験も、反省によつて十分にかみしめられて、はじめてすぐれた栄養となるのである。

「快活な世渡り」は、すべてを善意に解釈して世の中を明るく楽しく生きてゆくかうという、作者自ら実践してきた、一つの生き方を説いている。「ねずみの話」は、経験がどんなにたいせつであるか、そのどういふところに注意しなければならぬかを語つている。また日々の反省に最も有効な一つの方法は日記をつけることである。「ふじの花ぶさ」は正岡子規の日記であるが、これを通してかれが感じ考へたことを知るとともに、われ／＼自身も日記をつける習慣を養うようにしたい。「調味料について」では、われ／＼が日常氣にとめずに用いているものにも、それ／＼由來があることを注意しよう。「トロッコ」はよそうと思ひながら、よせずに失敗した少年を描いている。

このほかに、古來の偉人の反省録をはじめとして、われ／＼の反省の材料となる文章は多いし、毎日毎日いたるところに反省の種はころがっている。だがまずこれらの作品を通して、何をかみしめるかよりも、どんなにかみしめたらよいかについて学び、これを他におし廣めてゆくようにしようではないか。

〔一〕快活な世渡り

新渡戸 稻造

世人はやゝもすれば、男女ともに、にこ／＼するのを、げた／＼笑うと解釈し、かれはばかではな
いかなどと思ひ、苦しい境遇にありながら、げた／＼にや／＼すると解し、しかして当事者がいかに
心の裂けるごとき苦しい場合に、がまんしてにこ／＼し、笑いをもって涙を隠している苦心の多大な
るかを察せぬ者が多い。

怒りはとかく人に移しやすきものである。苦しみはとかくぐちとして述べたいものである。不幸は

これを口外して、他人にもなつてもらいたく思うものである。しかるに不幸や艱難かたを、ことごとく一まとめとなし、はなやかなふろしきに包み、世間には、みごとな、目ざめるごとさうるわしいふろしきであると見せて喜ばせながら、その中にある重荷を、ひとりで軽げになうということは、よほど偉い人でなければできない。ぼくは、人のにこ／＼しているのを見て、その偉大を思わざるをえない。

一体日本人は東洋流の豪傑を氣どる者が多い。人に会つても、えがお一つ示さぬを得意とし、人をにらみつけ、人がふるえて遠ざかると、かれは恐れたのであるとして、自ら偉くなつたように思っている。すなわち愛をもつて人を引きつけようとせず、恐れをもつて人を遠ざけるのを、偉大のしるしとし、社交的な人を見下げ、傍若無人にふるまう者を偉い人と心得ている。したがって、人に対してチアフルな者を重んぜぬ傾きがある。チアフルな人を見ると、他人におもねるとか、ごきげんとりをするとか、八方美人であるとか非難し、その人の心中にどれほどの苦痛があり、克己の錬磨れんばにより、怒りや苦しみを人に移さぬように努めているかを認めることができぬ。まことに情ないことではないか。

かくはいうものの、ぼくも平常チアフルにしていることは、なか／＼できないが、深くこのことの必要を感じてはいる。これは、人が社会に対する一つの義務であると思う。屋外を歩いていると、にがにがしい顔をして、人をにらみつける者がある。別にこわくは思わぬが、不愉快である。ちやうど意地わるの犬が、通行人にほえつくと同じである。ければすぐにも倒れるようなやせ犬でも、ほえつかれては、不愉快をおぼえる。

世の中はあい持ちであるから、互に力を與え、慰めてゆきたいものである。いっこうに名も知らぬ人でさえも、快くにこ／＼しているのを見れば、自分の苦しみを忘れるではないか。人生だもの、何人も多少ずつは重荷を負っている。互の荷物を手で助けあうことができなくとも、顔色で互に助けあえそうなものである。

英語のチアフルという文字は、中古のラテン語 *gaudere* すなわち英語の *be glad* から轉じたもので、顔という意味を持っているそうである。愉快な心が顔に現われることである。子供を見て愉快に思うのも、つまり子供はチアフルであるからである。

例の東洋豪傑流より見ると、チアフルなどは、さ、いな愚かなことと、卑しいもののように思う者もある。チアフルの動機にいたつては、あるいは卑しむべきこともある。たとえ、人におもねるためにするとか、商賣がからからするというのは、卑しむべきではあるが、しかし人に対して多少の慰安を與えようとする場合とか、自分の心中に感謝の意、慰安の意があつて、それが自然に外に現われてチアフルになつた場合などは、大いに尊敬すべきものである。威厳を保つというのは、四角張つて濫い顔をするばかりでない。チアフルな顔にも、なほ冒すべからざる威厳を含みうる。

電車・汽車などに乗りあわせた人々は、なんとなくにらみあつて、濫いした顔をしている。しかし、心の底に、もし一時でも電車内にいるのは、一家中に同居するも同じであるという感を起したら、決してこんな濫い顔をしてはいられない。一樹の下に宿つてさえも、同じ流れの水をくんでさえも、他生の縁ありというではないか。まして電車・汽車の中に同居すれば、なおさら、にらみあうべきではあるまい。もしお互に親切氣をもつて見る時は、目口顔の表情で、世人に対する好意が現われるべきものである。

心に愉快を感じチアフルとなることは修養を要する。しかし、少しの心がけがあれば、その心の種

を養って、大きくすることができると思う。恥ずかしいが、ぼくも子供の時、知らぬ人を見ると、氣にさわってたまらなかつた。その後、これは悪いことである、知らぬ人でも、自分に何の害を與えたこともなければ、またかれ自身に悪事を行ったこともない、さういふ理由は少しもないと思つて、相手を見つめてみると、いやなやつと思ふ心が自然にやわらいでくる。

消火器に、その頭部が細く丸くなつてゐるのがあつた。ちよつとたこの頭によく似てゐる。ぼくがかつて某所に行った時、ある婦人がそのポンプを見て「憎らしいたこ入道だよ。」と言つたのを聞いた。消火器がたこの形をしてゐるからといつて、少しも憎らしいことはない。なぜ「かわいらしいたこ入道」と言わぬのであろう。きたいなことを言うと思つたが、実は少しもきたいなことはない。ぼくも子供の時分に、さういふ感じをいだいていたのである。また往來を歩く時には、「いやな人だ。」とか、「きざだ。」とか言う婦人を見ることが多い。これらの人々は最初から人をつまはじきして近づけぬようにする。だから人が美服を着けてゐると直ちに悪口する。がらが似合はぬとか、色がどうか言ふ。悪い方面ばかり見、人のあらばかりをさがし、好意を持たずに、善惡を判断するようになる。こんな心がある間は、とうていチャフルになることは望まれない。

はちす葉の濁りにしまぬ心もてなどは露を玉とあざむく

遍昭

はすの葉におかれた露が、朝日にきら／＼と輝くさまは、玉のごとくである。濁りに染まぬ心をもつてゐるはちす葉が、人を欺くと言つて嘆いたものであるが、ぼくはそのように欺かれたなら、喜んで欺かれる。玉のごとく見え、玉を見ると同じ楽しみを目に與えるならば、玉でなくとも玉の代用とすることができるのであろう。玉は何ゆゑに尊いのであるか。玉があるからといつて、飢えた人が食物

の代用として食へることはできない。渴したとても、露となつてのどを潤さない。玉であるから尊いといふのは、代價を計算するからで、まだ／＼俗の考である。露を玉と欺くと言わずに、玉を露と欺くと言ふのも同じである。ぼくの心に映じ、ぼくに教訓を與える点から見ると、玉と露といずれが尊いかといへば、甲乙なしである。もちろん物質そのものの研究としては、化学的理學的の相違はあるが、心の修養材料としてならば、雨の一滴も宝石の一顆も同じである。ゆゑにチャフルとなるには、道具立てもいらない、材料も要しない。たゞ心の持ち方にある。心の持ち方さえ誤らなければ、何事でも修養の材料となり、目に見えぬものさえも、チャフルの材料になしうらと思ふ。

われ／＼が生涯に遭遇する事々物々は、善意にも惡意にも解せられるものが多く、物そのもの、事そのこと自身は、絶對的にいつて善でもなく惡でもない場合が多い。したがつて人生というものは、めい／＼の心のおきよう、すなわち心の持ちようによつて、どうでも取れる。世の中がうるさいと思へば、いたゞまれぬほどうるさいし、結構だと思へば、お礼の申しようもないほど結構になる。ゆゑにぼくは世に処するに善意をもつてし、チャフルに世渡りしたい。

(新渡戸博士文集)

研究

一 「けた／＼」と「こ／＼」とはどう違うか。

ほかにどんな笑ひ方があるか。

二 作者は、東洋豪傑をどういふ人物と考へてゐるか。

三 「憎らしい犬」「かわいらしい犬」など、目

につくものに、この二つの形容詞をつけて、そ

の感じを味わつてみよ。

四 チャフルな世渡りについで、それがよいか惡

いか、話しあおう。

【二】ふじの花ぶさ

正岡子規

正岡子規（慶應三年——明治三十五年）は明治の中ごろに活躍した文学者である。

子規は三十歳のころから難病におかされて、床に寝たまゝの生活を続けていたのであるが、この間しきりに俳論や歌論を発表し、すぐれた俳句や和歌を創作し、沈滞していた当時の俳壇と歌壇に一大警鐘の役目を果たした。

こゝにはかれの病床日記である「墨汁一滴」（明治三十四年）・「病牀六尺」（明治三十五年）の中から数編を選んでみた。

余の郷里にては時候が暖かになると「おなぐさみ」ということをする。これは郊外に出て遊ぶことで、一家一族近所合壁などの心安き者が互にさそい合わせて、少なきは三、四人、多きは二、三十人も連れ立ちて行くのである。それにはまず各自各家に弁当かまたはその他の食物を用意し、午刻より定め場所に行きて陣取る。その場所は多く川べの芝生にする。川が近くなければ水を得ることができぬからである。また川べには適當なる空地があるからでもある。そこに毛氈や毛布を敷いてすわり場所とする。敷物が足らぬ時には、重箱などを包んであるふろしきを廣げてその上にすわる。石ころの上にすわってしりが痛かったり、足の甲をつばなにつゝかれたりするのも興がある。こゝを本陣としておいて、食事時ならばみなこゝに集まつて食う。それにはみな弁当を開いてどれでも食うのでもとより彼我の別はない。茶は川水を汲んで来て、石のかまどにやかんをかけて沸かすので、食い盡く

した重箱などはやはりその川水できれいに洗うてしまふ。大きな砂川で、水が清くて浅くて崖が低いときているから、ちようほうで清潔でそれで危険がない。実にうまくできている。食事がすめば、さあ鬼ごとというので、子供などはほおべたの飯粒も取りあえず一度に立つて行く。女子供は普通にも三十人以上で、子供がその半ばを占めているから、にぎやかなことは非常だ。一度先生に連れられて詩会をこういう芝生で開いたこともあった。まことに閑静でよかつた。しかし男ばかりの詩会などは特別であつて、普通には女子供の遊びときまつてゐる。半日運動して、しかも清らかな空氣を吸うのであるから、年じゅう家にこもつてゐる女にはどれだけ愉快であるかわからぬ。もとよりその場所は町の外で、おゝかた半里ばかりの距離の所で、そこら往來の人などには見えぬ所である。歌舞伎座などへ行きて悪い空氣を吸うて喜んでゐる都の人は夢にも知らぬことであらう。（四月十日）

夕餉したゝめ終りて、仰向けに寝ながら左の方を見れば、机の上にふぢをいけたるいとよく水をあげて、花は今を盛りのありさまなり。艶にもうつくしきかなとひとりごちつゝ、そゞろに物語の昔などしぬばるるにつけて、あやしくも歌心なん催されける。この道には日ごろうとくならまざりたれば、おぼつかなくも筆を執りて、

瓶にさすふぢの花ぶさみじかければたゝみの上にとゝかざりけり

瓶にさすふぢの花ぶさ一ふさはかさねし書の上に垂れたり

ふぢなみの花の紫絵にかかばこき紫にかくべかりけり

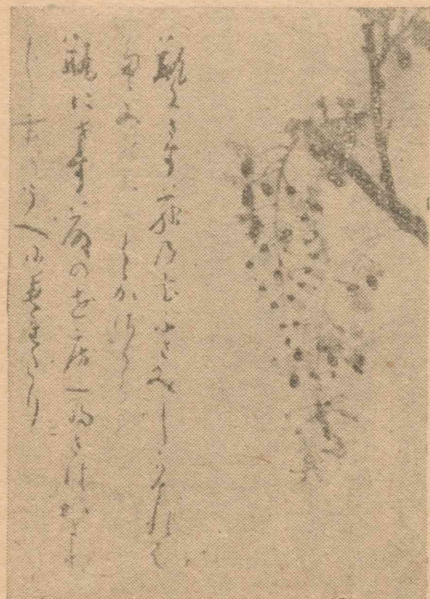
瓶にさすふぢの花ぶさ花垂れて病の牀に春暮れんとす

おだやかならぬふしもありがちながら、病のひまの筆のすさみは日ごろまれなる心やりなりけり。
をかしき春の一夜や。

(四月二十八日) (墨汁一滴)

写生ということは、絵をかくにも、記事文を書く上にもきわめて必要なもので、この手段によらなくしては、絵も記事文も全くできないというてもよいくらいである。これは早くより西洋では、用いられておった手段であるが、しかし昔の写生は不完全な写生であつたために、このころは更に進歩して、いっそう精密な手段を取るようになってゐる。しかるに日本では昔から写生ということをはなはだお

子規の筆跡



ろそかに見ておつたために、絵の発達を妨げ、また文章も歌もすべてのことがみな進歩しなかつたのである。それが習慣となつて、今日でもまだ写生の味を知らない人が十中の八、九である。絵の上にも詩歌の上にも、理想ということ唱える人が少なくないが、それは写生の味を知らない人であつて、写生ということを非常に浅薄なことでして排斥するのであるが、その実、理想の方がよほど浅薄であつて、とても写生の趣味の変化多きには及ばぬことである。理想の作が必ず悪いという

わけではないが、普通に理想として現われる作には、悪いのことが多いというのが事実である。理想というものは人間の考えを表わすのであるから、その人間が非常な奇才でない以上は、とうてい類似と陳腐を免かれぬようになるのは必然である。もとより子供に見せる時、無学なる人に見せる時、初心なる人に見せる時などには、理想ということがその人を感ぜしめることがないが、ほん學問あり見識ある以上の人に見せる時には、非常なる偉人の変わった理想でなければ、とうていその人を満足せしめることはできないであらう。これは今日以後のごとく教育の普及した時世には免かれぬことである。これに反して写生ということとは、天然を写すのであるから、天然の趣味が変化してゐるだけそれだけ、写生文・写生画の趣味も変化しうるのである。写生の作を見ると、ちょっと浅薄のように見えるも、深く味わえば味わうほど、変化が多く趣味が深い。写生の弊害をいへば、もちろんいろいろの弊害もあるであらうけれど、今日実際にあてはめてみても、理想の弊害ほどはなほだしくないのである。理想というやつは一いきに屋根の上に飛び上がるうとして、かえつて池の中に落ちこむようなことが多い。写生は平淡であるかわりに、さるしそこないはないのである。そうして平淡のうちに至味を寓するものにいたつては、その妙実に言うべからざるものがある。(六月二十六日)

きょうは水曜日である。朝から空は晴れたとみえて、病床に寝ておつても暑さを感じる。例によつて草花の写生をしたいと思うのであるが、今一つで草花帖を完結するところであるから、何か力のあるものをかきたい、それにはあさがおの花がよかろうと思つたが、あいにくことはあさがおを庭に植えなかつたというので、しかたがないから隣のあさがおの盆栽を借りにやつた。ところが何とまち

がえたかあさがおの花を二輪ばかりちぎつてもろうて来た。それではなんの役にも立たぬので、ひとり腹立てていると、隣の主人が来られて、しばらくぶりの面会であるので、余は麻痺剤を服してからいろいろの話をした。正午ごろに主人は帰られたが、その命令とみえて幼き娘たちはあさがおのほちを持って来てくれた。まだ一つだけ咲いていますと目の前に置かれるのを見ると、紫の花が一輪しおれもしないで残っている。そこで晝餉をおえて後写生にとりかゝったが、大略の輪郭を定めるだけにかなりにほねがおれて容易にはできあがらない。幼き娘たちはいくらか写生を見たいという野心があるので、遊びながら絵のできるのを待っていた。時々画帖をのぞきに來て、「まだよ。」と小さな声で失望的に言うのは、ことし七つになる子である。そのうち、内の者がほかに余っている絵の具を出してやったので、この七つになる子と、すぐその姉に当たる十になる子とふたりで絵をかきはじめた。年かさの大姉さんというのがそばにいて監督している。ふたりの子は余が写生したくだもの帖を廣げて、それを手本にして書いている様子である。「りんごにしましょう。」「これがいいでしょう。」「などと言うのは七つになる子で、「いえそれはむずかしくて書けません。さくらんぼにしましょう。」「と言うのは十になる子である。それから、この色が出ないとか、絵の具が足りないとかしきりに騒いでいたが、ついにその結果を余の前に持ち出した。見ると七つの子のさくらんぼの絵はちゃんとできている。十になる方を見ると、これもさくらんぼが更にたしかに写されている。原図よりはかえて手ぎわよくできているので、余は驚いた。やがてこれにも飽いたと見えて、あさがおの絵のできあがるのも待たずにみな帰ってしまうた。余はたった一輪の花を書いたのが成績がよくなかったので、やゝ困りながら、大きな葉の白い斑入りのやつを書いてみたが、これは紙が絵の具をはじくために全くできぬものもあり、またおのずから斑入りのようにできあがるのもあっておかしかった。つるのもつれているぐあいを見るのもなんとなくおもしろかった。

(八月二十三日) (病牀六尺)

研究

- 一 「おなぐさみ」を現在の遠足と比べてみよ。
- 二 ふじの花の短歌連作について、子規の感動の移つてゆくあとをたどってみよう。
- 三 写生についての子規の説の要点をあげよ。
- 四 これは五十年ほど前の文章であるが、あさが

おの写生の章から、今の標準語と違う言い方を指摘せよ。

五 きみたちの日記とこの病床日記とを比較してみよ。

〔三〕 ねずみの話

光 吉 夏 彌

わ な

「こゝへ來てから、子供たちは、急にめつきりふとつて、毛なみまでつや／＼してきたようですね。」

新しい家の食料品へやへ移つてから五日めの晩、おかあさんねずみは、元氣にたなの上をかけまわる子供たちを見上げて言いました。

「そりゃそうだと。第一、食べ物が違うんだもの。」

おとうさんねずみは、たなから引いて來た厚いチーズのかけらをぼろ／＼かじりながら言いました。

「毎日、ふんだんにごちそうを食べて、人もねこも来ないこの別天地でうろ／＼してりゃ、どんなやせねずみだってふとっつてしまうよ。」

「ほんとに——こんなおいしいチーズだって、はじめてですわね。」

おかあさんねずみもいっしょに、チーズのはしをかじりながら言いました。

「でも、わたしは時々こう思うんですのよ。こんな樂園のようなところでばかり暮らしていたら、子供は、ちっとも世間の風に当たらずに、経験というものができないから、大きくなってからかえって困りはしないかと思うんですけど。」

「なあに案じたことはないさ、経験と云ったって、そうはいそれとできるものじゃなし、いつかはいやでも自分でなめなきやならないものなんだから、まあなりゆきに任せて、子供のうちは、のんびりさせておいてやるのがいいんじゃないかね。」

そう、ふたりが静かに話しあっているところへ、ふいに頭の上で、ちゅうちゅう、かん高い声がありました。

「だれ、そんな声を出しているのは。」

おかあさんねずみは上に向かって、そうどなってから、おとうさんねずみに言いました。

「また、ニップが、妹たちをからかっているのかもしれないわ。ちよつと行って、見てやってみてください。」

「しようのないやつだ。」

おとうさんねずみは、のっそり腰をあげて、上のたなへ上がって行きました。

たぶん、事件はなんでもないことだったのでしょう。声はじきにやんで、まもなくおとうさんねずみは、またのっそりおりに来ました。

「ニップは何をしていたんですの。」

おかあさんねずみが聞きました。

「いや、ニップがいけないんじゃないんだ。ビビとディッケが小さい者どうしで、ちよいと、けんかをしていたんだよ、わなのことだね。」

「なんですって。」

おかあさんねずみは飛び上がって叫びました。

「わなですって。」

「うん。おゝかた、女中のやつがしかけて行ったんだろう。細い突っかい棒の先に板が渡してある例のやつが置いてあるんだ。そいつをビビとディッケが渡ろうとして、どっちが先に渡るかで、ひともめやっていたんだ。」

「まあ、……」

おかあさんねずみは天を仰いで叫びました。

「で、あなたは、どうなすったの。」

「むろん、そんなものを渡っちゃいけないってとめて来たさ。」

「それから、……それ以上、なにもおっしやらなかったの。そして、子供もそのまま置いていらしたの。」

「うん。」

「あなたはまあ、なんてのんきなかなんでしょう。子供をそんな危険にさらして置いて。」
おかあさんねずみは上のたなに向かって、大声で呼びました。

「ビビ、ディッケ、ビレ、ボレ、ニップ、ナップ。みんな、すぐに降りてらっしゃ
よ。」

かさこそ、ちよろちよろ、子供たちは、何事かと思つて、いっせいにかけおりて來ました。

「なんの用、おかあさん。」

「いいから、すぐ、おうちへ帰りなさい。大事な話があるから。」

おかあさんはそう言い捨てて、まっさきに自分たちの穴へかけこみました。続いてひとりひとり、子供たちが飛びこみ、あとからおとうさんが、食べ残しのチーズのかけらをくわえて、のっそりくぐりました。

注 意

「なんなの、おかあさん。お話なら、もつとあとでもいいんじゃないの。まだ、にわとりも鳴かないのに。」

子供たちはいつも寝る前のお話を聞く時のように、ずらりとおかあさんの前に丸く輪をつくってすわりました。

「きょうはね、いつものような、お姫様や王子さまのお話ではないのよ。」おかあさんは、まじめな顔をして言いました。「あなたがたの命にかゝわる、大事な話なのよ。」

「命ですって。」

「そうですとも。もうちょっとのところで、ビビかディッケか、どっちかひとりは命を落とすところだったんですよ。」

「いつ。」とビビが聞きました。

「今ですよ。たった今。」

「あら、どうして。」ビビは言いました。「上には、ねこも女中もいなかったじゃないの。」

「それだから、あなたがたはだめなのよ。まだこわいもの知らずで、——経験というものがなんにもないから。」

おかあさんが言うと、そばからディッケが聞きました。

「経験って、なあに。」

「経験というのはね、一口で言えば、この世の中に生きてゆく上に、わたしたちがぜひ持っているなければならない、大事なもののなの。おとなはみな持っているけど、子供はまた持っていないの。」

「おかあさん、持ってる。」

「え、持ってますとも。」

「じゃ、ちょうだい。」

「あたしにもちょうだい。」

ビビとディッケが小さい手をさし出しましたので、おかあさんは思わず、おとうさんと顔を見合せて、笑いだしてしまいました。

「困った人たちね。経験って、お菓子や品物じゃないのよ。恐ろしい思いや、つらい思いや、悲しい思いをして、自分で自分に積まなきゃならないものだけど、おとうさんやおかあさんの言うことをよく聞いて、それを自分のものにしていけば、自然、経験と同じものが得られるのよ。」

おかあさんはそう言って、またまじめな顔で話しました。

「わたしたちはつかねずみが、いつも警戒しなければならぬものに、ねこ人間があることは、もうよくわかっているわね。そしてねこはねずみをとる以外に、なんの能もなくて、この世になんのために生きているのかわからないけれど、人間はわたしたちにとって、ある意味で、なくてはならないものであることもわかっているでしょう。もしこの世に人間がいなかったら、この家の食料品べやのようなところも、ごちそうのおあまりもなくて、わたしたちは食べ物を手に入れるのに、どんなに困るかしないわね。その点、人間のいることはわたしたちにとって、たいへんありがたいことなんだけど、たゞ困ったことに、人間もねこと同じで、わたしたちはつかねずみと、どぶねずみの区別がつかず、ちゅうちゅうなくものはみんなどろぼうだと思ってるのよ。どぶねずみはもと／＼大どろぼうで、家じゅうを荒らしまわるばかりか、わたしたちの穴へまで侵入して来るんですから、こんなやつはやつつけてしまうのが当然なんだけど、わたしたちまで同じようにどろぼうだと思って、目のかたきにしているんだから、困ってしまうわね。そりゃ、わたしたちだってチーズのかけらや、クリームの一しずくくらいは、しょっちゅう無断でちょうだいしてるけど、それは結局、わたしたちが自分で食べ物を作れないんだから、しかたのないことなんだわ。それもだめとなったら、わたしたちは一体、どうして生きてゆけるというのでしょうか。それなのに、人間はそこところがわからないで、わ

たしたちもどぶねずみなみにねこに追いかけてまわさせるのよ。ねこはまたばかで、それよりほかに能がないから、同じ四つ足なままのくせに人間の手先となって、夜も眠らず目を光らしているんだけど、ほんとうはねこの方が、ねずみよりよっぽど大どろぼうなのよ。わたしたちは、どんなごちそうでも、たゞちよいとなめるだけだし、どぶねずみにしたって、そう／＼大きいものは引いて行かないのに、ねこときたら、この間もたなから丸ごとソーセージを一本失敬して、女中に追っかけまわされるやら、奥さんにしかられるやら、たいへんなさわざだったのよ。」

「ほんとに、あの時は、いい氣味だった。わしは下で聞いていて、胸がすうっとしたよ。」と、そばから、おとうさんが言いました。

「それ以来、ねこはなおさら食料品べやへ寄せつけられなくなったんだけど、そのかわり、今度はわなという恐ろしい物が使われたのよ。人間はそのことをねずみとりって呼んでるんだけど、いやな名まえでしょう。あたしはこの名まえを口にしただけでも、もうぞっとしちゃうわ。」

「ねずみとり——って、どんな物。」

ディッケが平氣な顔で聞きました。

「さっき、あなたがたが渡ろうとした、あれよ。あれがそうなのよ。細い突っかい棒の先に板が渡してあって、えさにつられて渡って行くと、もう一步というところで板がはずれて、下の水の中へまっさかさまに落っこっちゃうしかけになっているの。落ちたらもうおしまいよ。それをあなたとビビが渡りっこしていたというから、わたしは聞いただけで、もう命がちとまるくらい、びっくりしてしまつたのよ。」

「落ちたら、冷たいだろうな。」と、ニップが言いました。「おかあさん、落ちたことない。」
 「とんでもない。落ちたら、こんなにしていられるもんですか。にいさんがそれで死んでから、わたしは一度だって、そんな恐ろしいものに近よったこともないわ。」

「あら、おかあさんのにいさんは、それでおなくなりになったの。」と姉娘が言いました。「かわいそうなおじさま。」

「ほんとにわたしは思い出しても、残念でしかたがないの。そして、そんな恐ろしいものを考え出す人間がいることは、わたしたちにとってありがたいことなんだけど、ねこを使うほかに、こんな恐ろしい手まで考え出すんだから、よっぽど用心しないといけないのよ。わなはたとい、どんなに思いしごちそうがつけてあっても、決してそばへ近よってはいけませんよ。」

経 験

おかあさんの長い話が終ると、ビレが待ちかねたように言いました。

「もう一度上へ行っちゃいけない。あたし、まだ、食べ足りないんだけど。」

「ええ、行きましょう。」おかあさんもたぶん、おなかがすいていたのでしよう、すぐに賛成して先に立って上へ行って行きました。「そのかわり、今言ったことを絶対に忘れちゃダメよ。」

みんなが先に行ってしまったあとから、おとうさんといっしょに上へ行って行きながら、ニップが聞きました。

「経験って、結局、どんなことなの。ぼく、よくわからなかったんだけど。」

「経験ってのはね、……ええと、なんというかな……。」おとうさんは考えながら言いました。「つ

まり、自分で、いろんなことを、自分に積むことなんだよ。」

「その、積むってのが、よくわからないんですよ。」

「積むってのは、重ねることさ。たび重なるの、重なるなんだよ。」

ニップはそれでもまだ、よくわかりませんでした。けれども、頭より胃袋の方が、欲に燃えていたもので、穴から出ると、いちもくさんに、上のたなへかけ上がりました。

おとうさんは総領のナップと、おかあさんの三人で、下のチーズのたなにのぼりました。

上のたなではかさこそかさこそ、しばらく小さい足音が元気に聞えていましたが、やがて静かになりました。それはニップをはじめ五人の子供たちが、物珍しさにねずみとりのまわりに忍びよったからでした。はじめのうちは五人とも、さすがに少し離れたところから、こわくながめていましたが、そのうちニップとボレが、ずっとそばへよって行きました。そしてボレは、わなの突っかい棒の足のそばから、そっとたなの下をのぞきました。

「ほんとやだ。あんなところに水おけがあるわ。あすこへぼっしゃり、落っこちるのね。」

そう、ニップに言ったつもりでしたが、ニップの返事はなく、振りかえると同時に、ばしゃんと、大きな水の音がして、「あっ。」と言う子供たちの叫び声があがりました。

「たいへんだ、たいへんだ。」

ニップは、下の水に落っこちたのでした。ボレがたなのはしからのぞいている間に、わなの上に上がって、板がはずれるのといっしょに、まっさかさまに落っこちたのでした。

「どうしたの。だれか、落ちたのかさ。」

おかあさんも水の音にびっくりして、上のたなへ向かって聞きました。

「ニップが、落っこっちゃったんです。」

子供たちは泣きそうな声で答えました。

「まあ、ニップ。ニップが落っこちたんだって。」

おかあさんもおとうさんも瞬間、ぼうぜんとしてしまいました。ニップもどうしていいかわかりませんでした。

「かわいそうに。あいつは一番元気な、快活なやつだったのに——。」

おとうさんが目にいっぱい涙をためて言いました。

「ニップ、おいで。」

おかあさんはニップを呼んで、大急ぎで水おけのそばへ飛んで行きました。そしてニップに言いしました。

「上へ上がって見ておくれ。」

ニップは急いで、おけをのぼりました。が、途中でしんちゅうのたがで足をすべらせて、する／＼落っこちてしまいました。二度めにやとてっぺんまでのぼり着くと、おかあさんが聞きました。

「ニップは見えないかい。」

「はい。」

「あわも立っちゃいないかい。」

「なんにも。」

ニップのてい察もついに絶望に終わったようでした。

「あゝ、あ、ニップはどう／＼底に沈んで死んでしまったんだわ。かわいそうに。」

おかあさんが泣き、おとうさんが泣き、みんなが悲しい長い声をひいて泣きました。

幸 運

その晩、はつかねずみの一家は、もう食料品べやにとゞまろうとは思いませんでした。みんな打ちおれて、下のわが家へ帰って行きました。

しかし、おかあさんはなお氣になるとみえて、一番あとから水おけの方を何度も振り返りながらついて行きました。そしていよいよ穴へはいろいろとした時、不意に、中から子供たちの叫び声がしました。

「おや、また何かあったのかしら。」

おかあさんはあわてて、穴の中へ飛びこみました。見ると、へやの片すみにニップが、ぬれねずみのようにぐっしりぬれて、ぶる／＼寒そうにふるえています。

「まあ、ニップ。」おかあさんは叫びました。「おまえ、生きてるのかい。幽霊じゃないんだろうね。」

ニップは黙って、下を向いていました。

「どうやらおぼれ死にはしなかったらしい。どうだい、このいいかっこうは。」おとうさんはちゅっちゅっ、声を立てて笑いました。

「笑いごとじゃないわよ、ニップ。おまえは一体、どうしたっていうんだい。こんなにみんなを心

配させて——。」

言いながらもおかあさんは、ニップの背なかをべろ／＼なめて、毛の水を取ってやりました。

「おかあさんが、いけないんだい。」

ニップは小さい声でつぶやきました。

「なに、おかあさんがいけないって。」

「そうよ。」ニップは言いました。「もう一歩してところまではだいじょうぶだって言ったんだもの。それなのに半分しか渡らないうちに、もう板が落ちて、まっさかさまに落ちちゃったんです。」

「で、一体、どうやって、助かったんだい。」

おかあさんは聞きました。

「はじめは一直線に、おけの底まで沈んじゃって、またぼっかり浮かび上がったので、夢中でへりへ泳ぎ着いて、それから板をよじのぼって、一、二、三で床へ飛びおりるなり、大急ぎでこゝへ帰って来ちゃったの。」

「それで先へ帰っていたんだな。なんて、運のいいやつだ。」

おとうさんが、あきれたように言いました。

けれども、おかあさんは、

「なんて、しょうのない子なんでしょう。」

と、また別なことばで、あきれて言いました。

「さいわい、木のおけが置いてあったからいいようなものの、もししんちゅうやブリキのおけだっ

たら、どうなったと思うの、つめがすべって上がれるものじゃないのよ。あ、きょうはなんという日なんでしょう。これ以上、何かあったら、わたしは気が狂ってしまうわ。」

「全く、おかあさんの言う通りだ。みんな、もう少しおかあさんの言うことをきかないといけない。」

そばからおとうさんが言って、

「さあ、もう、きょうは寝るんだ。こんな恐ろしい日は寝てしまふにかぎる。」

と、みんなを連れて、奥の部屋へ立って行きました。

そしてひとり／＼寝かしつけてから、そとニップの耳もとへ口をよせて小さい声で言いました。

「わかったらう。経験って、どんなものか——。おまえは自分でなめてみたんだからな。」

(雑誌「少年少女」)

研究

- 一 はつかねずみの「家はだれ／＼かあげてみよ。
- 二 おとうさんとおかあさんの子供たちへの愛情の表わし方が、どう違うか比較せよ。
- 三 はつかねずみたちの、人間・ねこ・どぶねず

- 四 みに対する考え方をどう思うか。
- 五 経験とは、どういうものであるか。
- 五 こゝに描かれたねずみとりの原理を、実験してみよう。

〔四〕調味料について

足 立 勇

今日用いられている調味料には、塩・みそ・しょうゆ・砂糖・酢などがある。このうち塩・みそ・

酢などは、古くから用いられたものである。また、調味料に似たものに、食物にかおりやからみをつけて、食欲の進むようにするものがある。これには、しょうが・さんしょうなどがあり、しょうがは、しるやあえ物や、菜をつけたりする時にも用いた。

今日、塩は非常にたいせつなものになって、化学工業にも廣く用いられている。たとえば、この本の洋紙は塩の力でできるのである。というのは、洋紙の原料を溶かすに必要なかせいソーダは、塩からとるのである。こうした化学工業のことよりも、まず第一、塩は私たちのからだの栄養になくはならぬ品である。とりわけ日本人は植物性のものをおもに食べているので、欧米人よりも塩をよけいとらねばならぬ。日本人は一日に十五グラムほどの塩が必要であるといわれている。私たちのからだは毎日これほどの量の塩を取り入れているわけであるが、塩をじかにはなめない。料理に味をつける時塩を加えるので、その料理を食べながら塩を取り入れる。みそ・しょうゆやつけ物、魚の干物などは、塩を用いてこしらえたものであるから、それらの食品を食べる時塩を取り入れるのである。みそやつけ物などを作る時塩を用いるのは、その食品を長く保存できるようにするためであるが、そうするとまたよい味がつくのである。更に、私たちはみそしるやつけ物などを食べ、これらの食品を通して、あのからい塩をおいしいとほめながら、からだに取り入れるのである。

塩は、海の國の日本には、自然から恵まれた大きな産物の一つである。もともと、塩は岩塩として山からとったことがあるが、それも多くとれなかつたようであるし、海をめぐらしているのだから、わざ／＼山に行って塩をさがすに及ばなかつたのである。なお、海の塩が山からとれるわけを、お話ししてみると、何万年も遠い昔、海の中にあつた所が、その後地殻の変動から陸地になり、そこへ海の塩

が固まって地層になって残っていることがある。それが岩塩としてとれるのである。

わが海辺に塩を焼く煙のたちのぼっている景色は、昔から歌によまれ、絵にかかれていた。こゝに万葉集に載っている歌をあげてみると、

志可の海人は藻刈り塩焼きいとまなみくしげのおぐし取りも見なくに

この歌の意味は、志可の海人は、塩を焼くのに使う海藻を刈り集めたり、塩を焼いたりするに忙しく、暇がないので、くし箱の中のくしを手にとつてもみない、というのである。志可とは今の福岡縣の博多湾の入口にある島であるが、この志可だけではなくて、日本じゅうの婦人が大昔もこんなに働いていた。これは塩を焼く仕事に限つたことではなくて、上代は田や畑を耕すのはおもに婦人の仕事であつたらしく、こうした婦人の働きをたゝえた歌は、万葉集そのほかの歌集にたくさん載っている。

今日塩を製造する方法に二、三あり、更に電氣製塩法も行われることになつたが、昔から行われたものは、次のような方法であろう。まず海辺に砂で田のような場所を作り、海水をくんで、その砂の上に注ぎかける。これをくり返して日光にさらすと、塩の多くまじつた砂が得られるので、その砂を集めてつぼの上に置き、更に海水をくんでそれに注ぎかけると、つぼの中に塩分を多く含んだ海水がたまる。その海水をかまに入れて熱し、水分を蒸発させて塩を結晶させるのである。先の歌に海藻を刈り集めることが見えているが、大昔は砂のかわりに海藻を使い、海藻を積んだ上に海水を注ぎかけてから、上に述べたような方法で塩を作ることが行われたとみえる。

私たちは朝の食事にみそしるを食べている。毎朝のことなので、そのたいせつなわけを考えてみようともしないが、みそしるは外國にはなくて、わが國だけのもので、しかもわが國民にとってはたい

せつな食品である。飯にみそしるという取り合わせは、私たちの食事にもつてこのもので、地方によつては三度三度みそしるを吸っている所もある。飯とみそしるだけでも健康が保てると言われるほど、みそしるは私たちのからだの栄養になくはならぬものである。

みそがこのようにたいせつなわけは、たんばく質に富んだ豆で作つてあるからである。米や麦の飯にはからだの栄養に必要なでんぶんなどは多く含まれているが、たんばく質に乏しいので、それをみそで補うのである。たんばく質は魚にも多いが、ふだん魚からたんばく質をとることのできないような人々には、とりわけ、みそしるはたいせつなものである。

欧米の人たちが常食としているパンは、小麦の粉を練つて、それを発酵させ、焼いてふくらませたものである。わが上代にはパンはなかったが、それはパンのように、発酵させて食物を作ることを知らなかったのではない。発酵させることは、早くから行われていて、みそや酒を作つた。みそ・しょうゆ・酒を作るには、すべて発酵させねばならぬが、この発酵作用は、細菌の働きによるもので、それにはこうじを用いる。こうじは、米や麦から作るもので、すでに上代からあつて、「かむたち」といふ、みそや酒を作るのに用いられた。みその作り方は、大豆を煮て、それにこうじと塩を加えて発酵させる。

酔も古くからあつた。酔は米とこうじに水を加えて、夏の日にかもした。夏の暑い時にかもすのは、発酵が早いからである。今日の醸造酔は、酒かすや腐敗した酒などを原料にしてかもす。昔は酒かすなどから作ることもあつたであろう。

しょうゆもたいせつな食品で、それを作る材料はみそとやはり同じである。煮た大豆と小麦でこうじを作り、これに塩と水を加えて発酵させてから、布の袋に入れてこすと、しょうゆができる。みそもしょうゆも同じ材料で作るから、みそなたるからしるのたれるようにしておくと、しょうゆに似た液がたまる。これをたまりと言つて、しょうゆの代用にすることもある。しょうゆは室町時代になつてはじめてできた。古代の書物には、しょうゆとか、たまりとかいうことは見当たらぬ。しかし、そのころにはすでにみそを作つていたのであるから、しょうゆに似たものやたまりも作つていたことと思われる。

砂糖は砂糖きびから作るが、砂糖きびは熱い地方によく育つもので、アジアが原産である。砂糖がインドから西方に送られたことは聖書に見えており、西洋では早くから砂糖を用いてはいたけれど、古代の甘味料はおもにはちみつであつた。西洋でも砂糖をたくさん用いるようになったのは、そう古い昔ではなくて、こゝ三、四百年のことである。わが國では古代、砂糖が中國から渡つて來たことがあるが、非常に貴重なものにされていて、調味料には用いられなかつた。砂糖は江戸時代になつたらばつ／＼輸入され、はじめて調味料として用いられるようになったのである。

わが古代では、砂糖のかわりに、あめや、あますらせんや、はちみつを調味料にした。あめは、もち米やもちあわを蒸したものに熱湯を加え、大麦を発芽させたもやしを砕いたものをまぜて、適当な温度に保ち、そのしるをしぼつて煮つめてこしらえる。平安時代には米こうじも使つていたようである。あますらせんは、あますらともいい、あますらと呼ぶ草を煮て、それからとつたしるである。江戸時代になると、甘茶と呼ぶ草の下したのを、茶のようにして飲んでゐるが、あますらはこの甘茶のようなものであらう。あますらせんは諸國に産して、甘い味をつけるのに廣く用いられていた。

甘い味をつけるのに、今日も山村では干しがきを粉にしたものや、しぶがきを煮たしるを使っている所があるが、昔もこの干しがきを使っていたことも考えられる。

清少納言が著わした枕草子の中に、

あてなるもの……けづり氷にあまづらいれて、あたらしきかなまりにいれたる。

という文がある。かなまりとは金属製のおわん。この文の意味は、新しい金のおわんにあまづらを入れ、それに氷のかけらを浮かべたのは、上品な美しいものである、というのである。私たちが夏の暑い日に、コップにレモン水などを入れ、氷を浮かしたのを飲もうとして、その美しさに思わず見とれるか、清少納言もこれと同じ感じをしるしたのである。

(日本の食物史)

研究

- 一 製塩法の変遷を述べよ。
- 二 発酵させて作るものとして何々があげられてゐるか。そのほかに何があるかを考えてみよう。
- 三 甘味料としてどんなものがあるか。
- 四 「レモン水」ということは、外国語と日本

語とからできている。このようなことばを廣くさがしてみよう。

五 われ／＼がふだん氣にもかけず用いている調味料には、こゝに書かれているような由來がある。主食についても調べてみよう。

〔五〕 トロッコ

芥川龍之介

小田原熱海間に、軽便鉄道敷設の工事が始まったのは、良平の八つの年だった。良平は毎日村はず

れへ、その工事を見物に行つた。工事を、——といったところが、たゞトロッコで土を運搬する——それがおもしろさに見に行つたのである。

トロッコの上には土工がふたり、土を積んだうしろにたゞずんでいる。トロッコは山をくだるのだから、人手を借りずに走つて来る。あちるやうに車台が動いたり、土工のはんてんのすがひらついたり、細い線路がしなったり、——良平はそんな景色をながめながら、土工になりたいと思ふことがある。せめては一度でも土工といつしよに、トロッコへ乗りたいと思ふこともある。トロッコは村はずれの平地へ来ると、自然とそこに止まってしまう。と同時に、土工たちは、身軽にトロッコを飛びおりのが早いから、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し／＼、もと来た山の方へ登りはじめる。良平はその時、乗れないまでも、押すことさえできたらと思ふのである。

ある夕方、——それは二月の初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村はずれへ行つた。トロッコはどろだらけになつたまゝ、うす明かぬの中に並んでいる。が、そのほかは、どこを見ても、土工たちの姿は見えなかつた。三人の子供は恐る／＼、一番端にあるトロッコを押しした。トロッコは三人の力がそろつと、突然、ごろりと車輪をまわした。良平はこの音にひやりとした。しかし、二度めの音は、もうかれを驚かさなかつた。ごろり、ごろり、——トロッコはそういう音とともに、三人の手に押されながら、そろ／＼線路を登つて行つた。

そのうちに、かれこれ十間ほど来ると、線路のこうばいが急になりだした。トロッコも三人の力では、いくら押しても動かなくなつた。どうかすれば車といつしよに、押しもどされそうにもなることがある。良平はもういいと思つたから、年下のふたりにあいずをした。

「さあ、乗ろう。」

かれらは一度に手を離すと、トロッコの上へ飛び乗った。トロッコは最初おもむろに、それからみる勢いよく、一息に線路をくだりだした。そのとたんに、つき当たりの風景は、たちまち両側へ分かれるように、ずん／＼目の前へ展開してくる。——良平は顔に吹きつける日の暮れの風を感じながら、ほとんど有頂天になってしまった。

しかしトロッコは、二、三分の後、もうもとの終点に止まっていた。

「さあ、もう一度押しじゃあ。」

良平は年下のふたりといっしょに、またトロッコを押し上げにかゝった。が、まだ車輪も動かないうちに、突然かれらのうしろには、だれかの足音が聞えだした。のみならず、それは聞えだしたと思ふと、急にこういうどなり声に変わった。

「この野郎、だれに断ってトロにさわった。」

そこには古いしるしばんでんに、季節はずれの麦わら帽をかぶった、脊の高い土工がたゞずんでいた。——そういう姿が目にはいった時、良平は年下のふたりといっしょに、もう五、六間逃げだしていた。——それぎり、良平は使いの帰りに、人けのない工事場のトロッコを見ても、二度と乗ってみようと思つたことはない。

その後十日余りたつてから、良平はまたたつたひとり、晝過ぎの工事場にたゞずみながら、トロッコの来るのをながめていた。すると土を積んだトロッコのほかに、まくら木を積んだトロッコがいろいろ、これは本線になるはずの、太い線路を登つて来た。このトロッコを押しているのは、ふたりとも若い男だった。良平はかれらを見た時から、なんだか親しみやすいような気がした。「この人たちならばしかられない。」——かれはそう思いながら、トロッコのそばへかけて行つた。

「おじさん。押してやろうか。」

その中のひとり、——しまのシャツを着ている男は、うつ向きにトロッコを押したまゝ、思つた通り快い返事をした。

「お、押してくよう。」

良平はふたりの間にはいると、力いっばい押しはじめた。

「われはなか／＼力があるな。」

他のひとり、——耳に巻きたばこを吸んだ男も、こう良平をほめてくれた。

そのうちに線路のこうばいは、だん／＼らくになりはじめた。「もう押さなくともいい。」——良平は今にも言われるかと、内心気がかりでならなかった。が、若いふたりの土工は、前よりも腰を起したきり、黙々と車を押し続けていた。良平はとう／＼こらえきれずに、おず／＼こんなことを尋ねてみた。

「いつまでも押していい。」

「いい。」

ふたりは同時に返事をした。良平は、「やさしい人たちだ。」と思つた。

五、六町余り押し続けたら、線路はもう一度急こうばいになった。そこには両側のみかん畑に、黄色い実が幾つも目を受けている。

「のぼり道の方がいい、いつまでも押させてくれるから。」——良平はそんなことを考えながら、全身

でトロッコを押すようにした。

みかん畑の間を登りつめると、急に線路はくだりになった。しまのシャツを着ている男は、良平に、「やい乗れ。」と言った。良平はすぐに飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、みかん畑のにおいをあおりながら、ひたすべりに線路を走りだした。「押すよりも乗る方がずっといい。」——良平ははおりに風をはらませながら、あたりまえのことを考えた。「行きに押す所が多ければ、帰りにまた乗る所が多い。」——そもまた考えたりした。

竹やぶのある所へ来ると、トロッコは静かに、走るのをやめた。三人はまた前のように、重いトロッコを押しはじめた。竹やぶはいつか雑木林になった。つま先のぼりのところどころには、赤さびの線路も見えないほど、落ち葉のたまってある場所もあった。その道をやっと登りきったら、今度は高いがけの向こうに、廣々とうすら寒い海が開けた。と同時に、良平の頭には、あまり遠く来すぎたところが、急にはっきりと感じられた。

三人はまたトロッコへ乗った。車は海を右にしなから、雑木の枝の下を走って行った。しかし良平はさっきのように、おもしろい気持にはなれなかった。「もう帰ってくればいい。」——かれはそうも念じてみた。が、行く所まで行き着かなければ、トロッコもかれらも帰れないことは、もちろんかれにもわかりきっていた。

その次に車の止まったのは、切りくずした山を脊負っている、わら屋根の茶店の前だった。ふたりの土工はその店へはいると、乳のみ子をおぶったかみさんを相手に、ゆう／＼と茶などを飲みはじめた。良平はひとりいら／＼しながら、トロッコのまわりをまわってみた。トロッコにはがんじょうな

車台の板に、はねかえったどろがかわいていた。

しばらくの後、茶店を出て来しなに、巻きたばこを耳にはさんだ男は（その時はもうはさんでいなかったが）、トロッコのそばにいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子だをくれた。良平は冷淡に、「ありがとう。」と言った。が、すぐに、冷淡にしては相手にすまないと思ひなおした。かれはその冷淡さを取りつくろうように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい石油のにおいがしみついていた。

三人はトロッコを押しながら、ゆるい傾斜を登って行った。良平は車に手をかけていても、心はほかのことを考えていた。

その坂を向こうへくだりきると、また同じような茶店があった。土工たちがその中へはいった後、良平はトロッコに腰をかけながら、帰ることばかり気にしていた。茶店の前には花の咲いた梅に、西日の光が消えかゝっている。「もう日が暮れる。」——かれはそう考えると、ぼんやり腰かけてもいられなかった。トロッコの車輪をけつてみたり、ひとりでは動かないのを承知しながら、うん／＼それを押してみたり、——そんなことに氣持を紛らせていた。

ところが土工たちは、出て来ると、車の上のまくら木に手をかけながら、無造作にかれにこう言った。

「われはもう帰んな。おれたちはさようは向こう泊まりだから。」

「あんまり帰りがおそくなると、われの家でも心配するぞら。」

良平は一瞬間あつげにとられた。もうかれこれ暗くなること、去年の暮れ、母と岩村まで来たが、

きょうの道はその三、四倍あること、それを今からたつたひとり、歩いて帰らなければならぬこと、——そういうことが一時にわかつたのである。良平はほとんど泣きそうになった。が、泣いてもしかなかったと思つた。泣いている場合ではないと思つた。かれは若いふたりの土工に、取つてつめたようなおじぎをすると、どん／＼線路傳いに走りだした。

良平はしばらく無我夢中に線路のそばを走り続けた。そのうちにふところの菓子包みが、じゃまになることに気がついたから、それを道ばたへほうり出すついでに、板ぞうりもそこへ脱ぎ捨ててしまつた。すると薄いたびの裏へじかに小石が食いこんだが、足だけははるかに軽くなつた。かれは左に海を感じながら、急な坂道をかけ登つた。時々涙がこみあげてくると、自然に顔がゆがんでくる。——それは無理にがまんしても、鼻だけは絶えずく／＼鳴つた。

竹やぶのそばを駆け抜けると、夕焼けのした日金山の空も、もうほてりが消えかゝつていた。良平はいよ／＼気が気でなかつた。行きと帰りと変わるせいか、景色の違うのも不安だつた。すると今度は、着物までも、あせのぬれ通つたのが氣になつたから、やはり必死にかけ続けたなり、はおりを道ばたへ脱いで捨てた。

みかん畑へ来るころには、あたりは暗くなる一方だつた。「命さえ助かれば——」。良平はそう思ひながら、すべつてもつまづいても走つて行つた。

やつと遠い夕やみの中に、村はずれの工事場が見えた時、良平は一思いに泣きたくなつた。しかしその時もべそはかいたが、とう／＼泣かずにかけ続けた。

かれの村へはいつてみると、もう兩側の家々には、電燈の光がさしあつていた。良平はその電燈の

光に頭から汗の湯げの立つのが、かれ自身にもはっきりわかつた。井戸ばたに水をくんでいる女衆や、畑から帰つて来る男衆は、良平があえぎあえぎ走るのを見ては、「おい、どうしたね。」などと声をかけた。が、かれは無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明かるい家の前を走り過ぎた。

かれの家の門口へかけこんだ時、良平はとう／＼大声に、わつと泣きださずにはいられなかつた。その泣き声は、かれのまわりへ、一時に父や母を集まらせた。ことに母はなんとか言ひながら、良平のからだをかゝえるようにした。が、良平は手足をもがきながら、すゝりあげすゝりあげ泣き続けた。その声があまり激しかったせいか、近所の女衆も三、四人、うす暗い門口へ集まつて來た。父母はもちろん、その人たちは、口々にかれの泣くわけを尋ねた。しかしかれは、なんと言われても、泣き立てるよりほかにしかたがなかつた。あの遠い道をかけ通して來た、今までの心細さを振り返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない氣持に迫られながら……。

(芥川龍之介全集)

研究

- 一 時間の経過を示す語を選んで、その表現を味わつてみよ。
- 二 「トロッコを押し／＼」「恐る／＼」などのように、同じことばをくり返した用例を厚かにさがせ。
- 三 トロッコに乗ることができた時、良平はふだ

んあこがれていたほどの喜びを味わえたか。これをもととして、あこがれが実現された時の氣持について話しあおう。

四 良平は、帰ろうと思ひながら、する／＼遠くまで行つてしまつた。きみたちは、よそうと思ひながらよせずに、悪い結果をまねいたことは

ないか。
五 遠い道をたつたひとり帰らなければならなくなつた時、良平はほとんど泣きそりになつた

が、かれの家へかけこんで、はじめて泣きたした。その心理を考えてみよ。

三 文を解くかぎ

文章にはいろいろの種類がある。口語文と文語文、現代文と古文、また形態からいっても、小説・詩歌・随筆・戯曲・シナリオ・評論・記事などがあり、手紙・日記・傳記・序文なども考えられる。文章の特質は、その種類や形態によつて、それ／＼違つてゐるものであるから、文章を理解するには、この点を考えることがたいせつである。これまでいろいろの機会に、これらの点について学んできたが、こゝでもう一度研究してみよう。

「日本文と漢文」では、單語の使い方について注意し、國語に最も深い関係を持つ漢文が日本文にどんなに影響してゐるかを考えよう。「わかぬ浦」はわが古典の詩歌の世界をうかがわせる。「故郷の花」においては、漢文脈を含んだ日本文に触れるようにしたい。「はぎ大名」では、中世の口語を知るとともに狂言のおもしろみを味わおう。そして、こゝで養われた講読力を活用し、もっと廣く読む習慣をつけるようにしよう。

〔一〕 日本文と漢文

牛を追う

五十嵐 力

老農友五氏の話である。

日本の古語には、簡單なうちに実に奥深い眞理を含んだのがあるものです。いつぞや——もう二十年にもなりませうか——海上胤平（うみのかげひら）という歌人が、小出祭（こいでまつり）という人の歌を評した中に、小出氏の歌に「牛ひきかへるうんぬん」とあつたのをとがめて、外國は知らず、わが國では、昔から牛には「追う」と言いきつたものであるのに、「牛をひく」というのは、落ち着かないことばづかいだと言つたのがありました。当時私はそれを見て、歌人なんてひまつぶしにくだらんことを言つて楽しんでゐるものだと思つて、ばかにしてゐりましたが、その後十数年たつてはつと思つたことがありました。それはこういうわけです。

ある日、牛を一匹板橋まで送つてやる用があつて、ひとりの男に預けて出してやりましたが、ほどなく走つて来て、「乞食橋（こじきばし）の向こうまで行くと、牛がすわりこんで、どうしても動かなくなりました。」と言ふのです。「いくじのない弱虫だ。それじゃ、おまえが行つて手傳つてやれ。」と言つて、小力のある他の男をつけてやりましたが、しばらくすると、それがまた歸つて来て、「ふたりでも、どうしても立ちません。」と申しました。「ばかなやつだ。ふたりがかりで牛一匹動かせないやつがあるか。それじゃ五平、おまえ行つてやれ。」と申しますと、五平は、「情ないやつだな。それじゃおれがひとつ立たしてやろうか。」などと言つて、威勢よく出かけて行きましたが、しばらくすると、それもまた歸つて来て、「だんな、どうしても動きませんよ。きょうはどうかしたんですな。打つても、たゝいても、引つ張つても、だまして、ちつともききませんや。」と申しました。私は、「おかしなことだ。しかしおれが行けばどうにかなるだろう。」と怪しみながら、動物に対する飼主の威光と、男どもには

多少まざつた一日の長とを頼みにして、急いで行ってみますと、なるほど、牛のやつが、あるやしきの裏門の前に、大磐石と腰をすえており、まわりにはまっ黒に人だかりがしてあります。それから私は三人の男に手傳わせて、ひち打ったり、あやしたり、いろ／＼とくふうをしてみました。どうしても、ちっとも動かすことができません。

困りぬいて茫然としておりますと、人だかりの中に、はんでんを着ても、ひきおはいた馬方らしい六十かっこのじいさんがおりました。私に「だんな、それじゃ動きますまいよ。私がひとつやってみましょうか。」と言ってくれました。「それはありがたい、ぜひに。」と言ってねんごろに頼みますと、じいさんは私の手から鼻綱を取って、靜かに牛の右側に立ちました。右の手に持った綱を伸ばして、牛のしりべたを軽く打ちながら、「しっ、しっ。」と申しますと、大磐石の牛が、たちまち一身ぶるいして、びっくりと起き上がりました。それからじいさんは、うしろの方に立って、しりを打ちつゝ二、三度まるく引きまわしましたが、やがて三、四十間追って行って、「さあ、こうしてうしろから追っていらっしゃい。もうだいじょうぶです。」と言って、綱を渡してくれました。

「私は厚く礼を述べて別れましたが、この時電光のように私の頭に浮かんできたのは、例の海上氏の言われた、牛には「追う」というわが古言でありました。私はいつこう文学に不案内ですが、古い大和ことばの中には、いくらもこういうふうな、祖先が幾百年の經驗を結晶させて、三、四字の中に不動の眞理をたゞみこんだのがあることでしょう。」ことばの味わいなどというものも、実にえらいものですね。

(八重葎)

日本文と漢文

長沢規矩也

ことばや文章は、時代によって変化する。しかし、全然新しくなるということはまずありえない。前の時代に使っていたことばや文字が、その中に少なからず残っているし、また、同じ文字・熟語を使っているが、その意味が全く変わってしまったものもある。われ／＼が知らず知らずに使っていることばの中にも、このような要素がはいっているのである。

われ／＼の祖先は、固有の文字を有しなかった。傳説によると、應神天皇の時、百濟くだらから漢籍が傳わり、宮中では、皇子をはじめ、多くの人々が、百濟の人について漢文を習った。その時には、おそらく、百濟に傳わつた漢字音で、この漢文を読んだものであるが、漢文に慣れるにつれて、漢文をまねて作るようになり、またこの漢字の発音や意味を借りて、自分たちのことばを写す方法を考へ出した。古事記や風土記かどきという書物はかようにして作り出されたものであり、万葉集に収められた歌はかようにしてつゞられたものである。朝鮮半島からはついで佛教が輸入された。その經文はやはり漢文に訳されたまゝであつて、それをわれ／＼の祖先は音読していた。

佛典はもとより、漢籍の一部も、かなり後まで音読されていた。その漢字音には、漢音と吳音との別があり、前者は隋唐の長安附近の音を写し、後者は江浙地方の音を写したものであるが、われ／＼の祖先が発音しにくかつた音は、なまけて発音されるようになった。したがつて、両者はともに隋唐の音そのまゝではない。

國語を漢字で写すことが行われるようになって、その逆に、漢文を、その原形をくずさず、巧み

に日本語化して読みこなす方法が考え出された。これがいわゆる訓読で、漢字の音読も混じているが、読んだり、書きくだしたりすれば、ほぼ当時の日本語である。

平安時代になって、ひらがなで書かれたかな文が上流社会を中心に発達したが、その後、僧侶など、漢文を講ずる人々の間には、漢字の間に、活用や助辞をはさむ書き方が行われ、轉じて後世いわゆる和漢混淆文わかんこゆうぶんといふかなまじり文として発達し、その文中には漢土の熟語や故事が豊富にはいつた。それが次第に変化して現代の文語文になったので、一方、明治以來加わった欧米の訳語には漢字を連ねたものが多く、ことに専門の術語においてはなほだしい。文語文ばかりか、今日の口語文の中にも少なからぬ古來の漢字・漢語がはいっているのに対して、純粹の古代の國語があまりはいっていないのは、漢語が簡潔であるからでもあろう。

和漢混淆文が行われるようになって、公私の文書の多くは漢文体であった。それは純粹の漢文ではなくて、漢字ばかり連ね、しかも漢語でないことばがはいっていた。公家などの日記は特にそうであった。男子の書簡文には一種の型ができ、平安時代の口語を混じ、ついに候文そうぶんとなった。後世の候文は次第にかな書きの部分が多くなってきたが、なお漢字やあて字が多く、漢文式の文字の倒置もそのまゝ行われている。「日出度」「被下間敷」「被遊度由」「奉懇願候」などみなその例である。

鎌倉・室町時代には、漢文・漢詩は公家の間にも行われたが、主として僧侶の間に盛んであった。いわゆる五山文学がそれである。しかるに、江戸時代になっては、徳川氏の右文によって、儒学が廣く行われ、漢文が儒者の間で作られたのみならず、漢文教育が知識階級の間にも普及したので、漢文・漢詩は廣く知識人の間に流行し、たとえば、碑文とか、辞令とか、特殊の文は、近來まで、和文よりも

漢文でつゞられるのが慣習となっていた。漢文教育によって、漢土の思想も少なからずわれ／＼の祖先の頭腦の中に注入され、その作品中にも現われた。唐制模倣の上代の貴族はもとより、宋元の風習を輸入した中世の禪僧によって、古來の衣食住の中にも、かなり多くの漢土の習慣が混入されている。漢土の文化は、文章ばかりでなく、精神的にも、物質的にも、わが國に影響したところが多い。

研究

- 一 「牛を追う」に見られるように、火にかけて
 食物を作る場合に、「飯をたく」「かゆをに
 する」「湯をわかす」「のりをあぶる」「もちを
 焼く」など、それ／＼違つた動詞と結びついて
 いる。人・鳥・魚・へび・かえるなどが動く場
 合について、同じような例を考えてみよう。
- 二 左のことばについて調べてみよう。
 イ 幕を切つて落す
 ロ 戸を立てる
 三 「笑止」「有難し」の意味を、辞書によって
 調べてみよう。
- 四 「日本文と漢文」の大意を書いてみよう。

〔二〕 わかの浦

万葉集は、千二百年ほど前、大和の地に文化の栄えたところによまれた和歌を集めたもので、歌数は約四千五百首に及んでいる。編者についてはさまざまの説があるが、だいたい、大伴家持が整理したものといわれている。それほど清純な感動が、万葉集の生命だといわれる。この歌集には、短歌のほか、長歌・旋頭歌などが収められており、作者はあらゆる階層にわたっている。

古今集は、万葉集から百年ほど後に、紀貫之らが中心になって編纂したもので、最初の勅撰和歌集である。歌数は万葉集の四分の一ぐらいで、ほとんどすべてが短歌である。形式といい、表現といい、美しい調和を見せていて、すべての点でこれから後に出る歌集の標準とされた。

また、俳句は江戸時代に、盛んに行われたが、こゝでは芭蕉以後に活躍した俳人の作品を取り上げ、これらを併年代順に並べてみた。これらの俳句をよく読んで、俳句の変遷と現代俳句へのつながりを考えてみることにしたい。

萬葉集
の海
の浦

万葉集

持統天皇

春すぎて夏きたるらし白たへの衣ほしたり天の香具出

柿本人麻呂

ともしびの明石大門に入らむ日やこぎ別れなむ家のあたり見ず
淡海の海夕波千鳥波が鳴けば心もしのにいにしへ思ほゆ

あしひきの山河の瀬のなるなべに弓月が岳に雲立ちわたる

(柿本人麻呂歌集)

水門の葦の末葉をたれか手折りしわがせこが振る手を見むとわれぞ手折りし

いはそいぐ垂水の上のさわらびのもえいづる春になりけるかも

志貴皇子

元暦本万葉集

春日山鹿野歌二首

春野全鹿野を眺む伎守長悲許能暮影
休醫を久世
そこののよふまふいなるいさうらうら
このゆふけしうらむいなるいさうら
和我至度能伴結左村竹布人同能於等
休守藤野伎許能由布故す母

沫雪のほどろほどろに降りしけば平城のみやこし思ほゆるかも

大伴旅人
山上憶良

子等を思ふ歌
うり食めば 子ども思ほゆ くり食めば ましてしのばゆ いづくより 來たりしも
のぞ 眼交に もとな懸りて 安寝しなさぬ

銀も 金も 玉も 何せむにまされる宝子にしかめやも

三文を解くかぎ

わかかの浦に潮満ち來れば濁を無み葦べをさして鶴鳴きわたる

山部 赤人

み吉野の象山の際の木末にはこゝだも騒ぐ鳥の声かも

ぬばたまの夜のふけぬれば久木生ふる清き河原に千鳥しば鳴く

吉野なる夏実の河の川淀にかもぞ鳴くなる山かげにして

湯原 王

春の野にかすみたなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴くも
わがやどのいさゝ群竹吹く風の音のかそけきこのゆふべかも

大伴 家持

古今集

木の間よりもりくる月のかげ見れば心づくしの秋は來にけり
すがる鳴く秋のはぎはら朝たちて旅ゆく人をいつとか待たむ

よみ人しらす

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

藤原 敏行

朝ぼらけありあけの月と見るまでに吉野の里に降れる白雪

坂上 是則

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞむかしの香ににほひける

紀 貫之

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

紀 友則

春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる

凡河内 躬恒

俳句

この木戸や鎖のさされて冬の月

其角

梅一輪一輪ほどのあたゝかさ

嵐 雪

應々といへどたゝくや雪の門

去 來

大原やてふの出で舞ふおぼる月

丈 草

うぐひすやげたの齒につく小田の土

凡 兆

ぼたん散つてうちかさなりぬ二三片

燕 村

四五人に月落ちかゝる踊かな

すゞめの子そこのけそこのけお馬が通る

一 子規

ひらくとてふく黄なり水の上

子規

いすを置くや薔薇にひざの触るところ

研究

一 「ひさかたの光」「ねばたまの夜」の「ひさかたの」「ねばたまの」は、枕詞とよばれ、次に來る「光」「夜」などのことばと結びついて、声調を整えたり、趣をそえたりする。枕詞をさがして、その結びつくことばをあげてみよう。

二 歌には、敘景歌と抒情歌とがある。一々の作品について、このどちらに当たるかを、話しあおう。

三 「あしひきの」の歌と「春の野に」の歌とを比べてみると、はじめの歌は「あしひきの山河の瀬のなるなべに弓月が岳に雲立ちわたる」というように、ことばの切れ目に同じ音を幾つも

つけて並べられており、あとの歌は「春の野にかすみたなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴くも」というようにことばの切れ目に五十音図のイの段の音を幾つも続けて並べられている。こういう点だけからいえば、二首の歌は同じような感じを與えるはずだと考えられそうであるが、はたしてそうであるかどうかを考えてみよう。

とばを用いずに、そうした感情を、より生き生きと表わすところに、俳句の特徴がある。他の作品について、その感情を求めてみよう。

示すことはない。これを季題といい、俳句はたいていそれを含んでいる。どのことばが、どの季節を表わしているか、一々の作品について調べてみよう。

〔三〕 故郷の花

平家物語

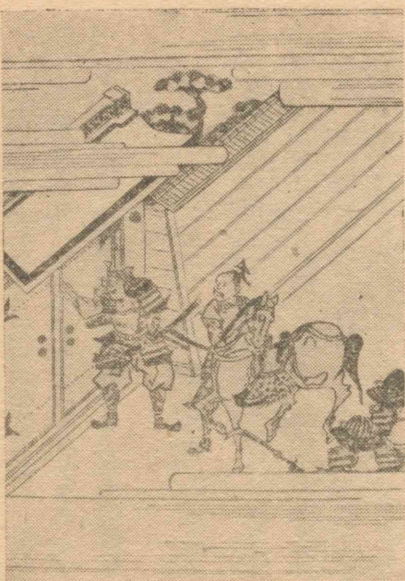
平安時代の末には、大きな社会の変動があった。藤原氏を中心とする公家の政權が平氏に移り、更にその平氏も源氏のために滅ぼされて、鎌倉に武家政治が始まるのである。平家物語十二卷は、平氏の興亡を主として、その時代の内乱を題材とした歴史小説である。こういう戦争を描いた小説には、他に保元物語・平治物語・太平記などがあるが、これらを軍記物語という。平家物語を貫ぬくものは盛者必衰、人生無常の思想であるが、と同時に変動期にありがちな新旧思想の対立がみられ、文と武、優雅と勇壯などの対照的な要素が混沌としてうす巻いている。文章もかな文体に漢文脈のいりまじった和漢混濁文である。

また、この物語は今日のように黙読するだけではなく、おぼせいの前で朗読し、あるいはめくら法師が節をつけて語ったものである。鎌倉時代以後長い間、多数の人々はこれを聞いて楽しんできたものであった。こういうものを語り物というが、他の語り物がしばしば「そうであるように、本書も作者が明らかでない。幾人かの人が手を加え修正増補して現在の形になったといわれている。つまり多くの人が制作に参加し、廣く國民が楽しんだ國民文学なのであった。

次に掲げるのは、卷七の「忠度の都落」である。壽永二年（一一八三）の秋、平家の一門は木曾義仲が京都に攻め上るとのしらせに接して、あわただしく都を落ちて行く。

薩摩の守忠度は、いづくよりか帰られたりけん、侍五騎、童一人、わが身ともにひたかぶと七騎、取つて返し、五條の三位俊成の卿のもとにおはして見たまへば、門戸を閉ぢて開かず。忠度と名のりたまへば、落人帰り來たれりとて、その内騒ぎあへり。薩摩の守、急ぎ馬より飛んであり、自ら高らかに申されけるは、「これは三位殿に申すべき事あつて、忠度が参つて候。たとひ門をばあけられずとも、この際まで立ち寄りたまへ。申すべき事の候。」と申されたりければ、俊成の卿、「その人ならば苦しかるまじ、あけて入れ申せ。」とて、門をあけて対面ありけり。事の体何となうものあはれなり。

忠度が参つて候



をかうむつて、草の陰にてもうれしと存じ候はば、遠き御守とこそなり参らせ候はんずれ。」とて、日

二、三箇年は、京都の騒ぎ、國々の乱いで來、あまつさへ当家の身の上にかかりなつて候へば、常に参り寄ることも候はず。君すでに帝都をいでさせ給ひぬ。一門の運命今日早盡き果て候。それにつき候うては、撰集の御沙汰あるべき由、承つて候ひしほどに、生涯の面目に、一首なりとも御恩をかうむらうと存じ候ひつるに、かゝる世の乱れいで來て、その沙汰なく候ふ條、たゞ一身の嘆きと存ずる候。この後世静まつて、撰集の御沙汰候はば、これに候ふ巻物の中に、さりぬべき歌候はば、一首なりとも御恩

ごろよみ置かれたる歌どもの中に、秀歌とおぼしきを百余首、書き集められたりける巻物を、今はとて打ち立たれける時、これを取つて持たれたりけるを、鎧の引き合はせより取りいでて、俊成の卿に奉らる。三位、これを開いて見たまひて、「かゝる忘れがたみどもを賜はり候ふ上は、ゆめ／＼疎略を存ずまじう候。さてもたゞ今の御わたりこそ、情も深う、哀れもことにすぐれて、感涙おさへ難うこそ候へ。」とのたまへば、薩摩の守、「かばねを野山にさらさばさらせ、憂き名を西海の波に流さば流せ。今は憂き世に思ひ置く事なし。さらば暇申して。」とて、馬に打ち乗り、甲の緒をしめて、西をさしてぞ歩ませたまふ。三位後をはるかに見送つて立たれたれば、忠度の声とおぼしくて、「前途程遠し、思ひを雁山の夕べの雲に馳す。」と高らかに口ずさみたまへば、俊成の卿も、いとゞ哀れに覚えて、涙をおさへて入りたまひぬ。

その後世静まつて、千載集を撰ぜられけるに、忠度の、ありしありさま、言ひ置きし言の葉、いまさら思ひいでて哀れなりけり。くだんの巻物の中に、さりぬべき歌いくらもありけれども、その身勅勘の人なれば、名字をばあらはされず、故郷の花といふ題にてよまれたりける歌一首ぞ、読み人知らずと入れられたる。

さゞ波や志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな

その身朝敵となりぬる上は、しさいに及ばずといひながら、恨めしかりし事どもなり。

研究

一 忠度は武士であるが、文学を愛していた。

三 文を解くかぎ

— どういうところでそれがわかるか。

- 二 俊成が忠度の歌を千載集に入れたことを作者はどう思ったか。きみたちはどう思うか。
- 三 「何となう」は「何となく」のウ音便であり、

「参つて」は「参りて」の促音便である。文中のウ音便と促音便とをさがせ。

〔四〕 はぎ大名

狂言

狂言は室町時代に行われた喜劇であり、笑いの文学である。当時の実社会に題材を取り、大名・僧侶・商人などさまざまな人物を登場させて、巧妙な口語の対話と所作の中に、明朗な、あるいは皮肉なおかしみを表現しようとしている。同時代に大成した能楽と並んで、上流階級の人々に觀賞されたのみならず、廣く民衆の娯樂として愛された。江戸時代の歌舞伎に大きな影響を與え、笑話・落語の材料となるなど、後代文学に及ぼすところ、大であったが、狂言自体も江戸時代を経て、現代もお実際に演じられていて、最も長い生命を持つ演劇の一つであるといえる。

大名

太郎冠者

亭主

大名「遠國にかくれもない大名です。長々在京いたせば、心が屈してあしうござるによつて、けふはどれへぞ遊山に出うと存ずる。太郎冠者あるかやい。太郎冠者「御前に。大名「なんぢをよびいだすこと別なることでもない。長々在京すれば、心が屈してあしいによつて、けふはどれへぞ遊山に出うと思ふが何とあらうぞ。太郎冠者「御意なくは申し上げうと存じてござる。これは一段とようご

ざりませう。大名「さりながら、このあたりはおほかた見盡くいたによつて、けふはどれへぞ珍しい所へ行きたいものぢや。太郎冠者「まことにこのあたりはおほかた御見物なされましたによつて、今日はどれへぞ珍しい所へ、お供申したうござるが、どこもとがようござらうぞ。大名「なんぢ分別をしてみよ。太郎冠者「さればどのあたりがようござらうぞ。大名「どこもとがよからうぞ。太郎冠者「いえ、下京へんによい庭を持たれたちかたがござるが、これにたゞ今、宮城野のはぎが盛りでござる。これへお供いたしませう。大名「それは行きたいものぢやが、先の亭主と知る人でないによつて、え行かれまい。太郎冠者「それは苦しうござらぬ。かねて私の知る人になつておきましてござる。大名「いえ、それならばおつつけて行かう。さあ、来い。太郎冠者「まづ待たせられい。大名「待てとは。太郎冠者「あれへお腰をかけさせらるれば、きまつて亭主が歌を所望いたしますが、それがなりませうか。大名「はて、亭主が所望するならば、恥づかしいことぢやが、一つ二つうたはうまでよ。太郎冠者「こなたの仰せらるるは小歌のこと。私の申すは三十一字ある歌のことござる。大名「こゝな者は。三十一字ある歌もあらうぞ、また五十字、百字ある歌もあらうわさて。太郎冠者「さりとはその小歌のことではござらぬ。三十一字に限つて、はぎの花ををり入れ、当座によむ歌のことござる。大名「そのやうなむつかしい所ならば、行くまいまよ。太郎冠者「はて、これほどにまでおぼしめしたたせられて、おいでなされぬと申すは、残念なことござる。いや、それについて、あたりの若い衆の、はぎを見に行くにあつて、歌の下よみをおかれたを、私が承つて覚えてをります。これをこなたへ教へませうが何とでござる。大名「さてその歌は何といふ歌ぢや。太郎冠者「別にむつかしいこともござらぬ。七重八重九重とこそ思ひ

しに十重咲きいづるはぎの花かな、と申す歌でござる。大名「まづはおもしろさうなことぢやが、さてそれはたが言ふことぢや。太郎冠者「こなたの仰せらるることとござる。大名「身どもひとりで。太郎冠者「歌を幾たりでよむものでござる。大名「いかないかな、そのやうなむつかしいことが、一年や二年習うて言はるることではないやい。太郎冠者「これほどのことがなりませぬか。大名「なか／＼。太郎冠者「さて／＼それはにが／＼しいこととござる。はあ、何といたいてようござらうぞ。大名「されば何としてよからうぞ。太郎冠者「いえ、物によそへては何とでござる。大名「いかにそれがしが愚鈍なというて、物によそへて覚えられぬことはあるまいが、さて何によそふるぞ。太郎冠者「まづこの扇子と申す物が、大数骨の十本ある物でござる。大名「お、十本ある物ぢや。太郎冠者「七重八重と申す時は、七本八本ひらきませう。九重に九本、十重咲きいづるに、ばらりとひらきませうが何とでござる。大名「一段とよからうが、まだあとに何やらあるやうな。太郎冠者「このあとの、はぎの花かなはなりませう。大名「む、これもなるまい。太郎冠者「これほどのがなりませぬか。大名「なか／＼、ならぬ。太郎冠者「さて／＼氣の毒なこととござる。これは何によそへたものでござらうぞ。大名「されば何がよからうぞ。太郎冠者「いや、これもよいよそへ物がござる。大名「何によそふるぞ。太郎冠者「常々こなたの私をしからせらるるに、すねはぎの伸びての、かゝうでのと仰せらるるによつて、慮外ながらむかうずねと鼻の先をお目にかけてませう。大名「これは一段とよからう。それならばおつつけて行かう。太郎冠者「それがようござらう。大名「さあ／＼、来い／＼。太郎冠者「参りまする、参りまする。大名「さてその庭は景の

よい庭か。太郎冠者「つゝと打ち開いた景のよい庭でござる。あれへおいでなされたならば、何かをさしおいてほめさせられい。大名「ほめてよいことならば、いかほどもほめう。さてほどは遠いか。太郎冠者「今少しでござる。急がせられい。大名「心得た。太郎冠者「いや、参るほどにこれとござる。大名「これか。太郎冠者「こなたのお供いたいた通り申しませう。まづそれに待たせられい。大名「心得た。

太郎冠者「物申、案内申。亭主「表に物申とある。案内とはたそ。どなたでござる。太郎冠者「私とござる。亭主「えい太郎冠者、そなたならば案内に及ばうか。なぜに／＼と通りはめされぬぞ。太郎冠者「さやうには存じてござれども、お客ばしござらうかと存じて、案内をこひました。さてたゞ今参るも別なることでもござらぬ。私の頼うだ者が、こなたのお庭を聞きおよばれました、何とぞ見せてくだされうならばかたしけなうござると申されます。亭主「近ごろやすいことなれども、この間は不掃除ソウジなによつて、お目にかくることはなるまい。太郎冠者「そのぶんは苦しうござらぬ。はや御門前まで参られました。亭主「やあ／＼、門前まではやおいでなされた。太郎冠者「なかなか。亭主「それならばお目にかけてうほどに、かうお通りなされいとおしやらうぞ。またそれがしをも、よい時分に引き合はいてくれさしめ。太郎冠者「心得ました。まうし、かうお通りなされいと申されまする。大名「通らうか。太郎冠者「つゝと通らせられい。大名「亭主は内にか。太郎冠者「内にてござる。つゝと通らせられい。大名「心得た。はあ、これは打ち開いた景のよい庭ぢやなあ。太郎冠者「ちやうどござる。大名「とてもこのことにゆるりと見物せう。床しやうどをくれい。太郎冠者「かしこまつてござる。御亭主、あれへ出させられい。亭主「心得た。太郎冠者「はあ、お床

几でござる。大名「太郎冠者これへ出い。太郎冠者「かしまつてござる。大名「さて／＼これ
 れは聞きおちようだよりは、打ち開いた景のよい庭ぢやなあ。太郎冠者「さやうでござる。それへ出
 られましたが御亭主でござる。大名「なう／＼、亭主、亭主。亭主「はあ。大名「けふはふと
 庭を無心申したに、さつそく見せておくりやつて、満足いたす。亭主「これは不掃除な所へお腰を
 掛けられて面目もござらぬ。大名「やい太郎冠者。太郎冠者「はあ。大名「不掃除なとおしや
 るが、すみからすみまで、ちりが一つもないやい。太郎冠者「常々掃除の者をつけておかれまする。
 大名「さうであらう。やい太郎冠者、あの鳥さきに見ゆる木は何ぢや。太郎冠者「あれは梅の古木
 さうにござる。大名「何ぢや、こぶく。太郎冠者「しい。古木でござる。大名「古木みごとに
 ありやる。亭主「はあ。大名「やい太郎冠者、あの古木に、つゝと地をはうて、上へきつとたち
 のびた枝がある。太郎冠者「ござりまする。大名「あれがよいしものがある。太郎冠者「何にな
 りまする。大名「あそこから引き切つて、茶うすのひき木。太郎冠者「しい。亭主「承りまする。
 大名「なう／＼。亭主「はあ。大名「茶うすのひき木などにおめさりやるなや。亭主「私の秘
 藏ひかくの木でござるによつて、むさとさやうのものにはいたしませぬ。大名「それがよからう。やい太郎
 冠者、こちらのすみにまつ黒な物がよせかけてある。あれは何ぢや。太郎冠者「あれは立て石さう
 にござる。大名「何ぢや、たけ石。太郎冠者「しい。立て石でござる。大名「なう／＼、亭主
 亭主。亭主「はあ。大名「立て石みごとにありやる。亭主「あれは北山より引かせましてござ
 る。大名「それはさうさなこと。亭主「はあ。大名「やい太郎冠者、あの立て石に、にぎりこ
 ぶしほど白い所がある。太郎冠者「ござりまする。大名「あれもよいしものがあるやい。太郎

冠者「何になりまする。大名「あそこから打ちかいて火打ち石。太郎冠者「しい。亭主「承りま
 する。大名「なう／＼、亭主、亭主。亭主「はあ。大名「かまへて火打ち石などにおめさりや
 るなや。亭主「さやうの物にいたすことではござらぬ。大名「それがよからう。やい太郎冠者、
 またこちらのすみに、まつかいな物が見ゆるが、あれは何ぢや。太郎冠者「あれは宮城野のはぎで
 ござる。大名「かのむつかしいのか。太郎冠者「さやうでござる。大名「はぎみごとにありやる。
 亭主「もはや落花いたしました。大名「何ぢや、落馬した。太郎冠者「いや、落花でござる。大名
 「落花みごとにありやる。亭主「はあ。太郎冠者殿、御存じの通り仰せ上げられてください。太
 郎冠者「心得ました。はあ、亭主申されますは、これへお腰を掛けらるるほどのおかたへは、歌を
 一首づつ所望申します。こなたにも何とぞ一首遊ばしてくださいと申されます。大名「何ぢ
 や、亭主が歌を所望する。太郎冠者「なか／＼。大名「なう／＼、亭主、亭主。亭主「はあ。
 大名「それがしはゐなか者で、つひに歌などをようだことはおりない。これはゆるいてくれさしめ。
 亭主「これは定めて御卑下でがなござらう。これへお腰を掛けさせらるるほどのおかたは、みな一首
 づつ遊ばします。こなたにも何とぞ一首よませられてくださいならば、私の外聞にもなること
 でござる。大名「何ぢや、外聞。亭主「なか／＼。大名「やい太郎冠者、いなことを外聞にめさ
 るなあ。太郎冠者「さやうでござる。大名「外聞ともおしやるによつて、一首ようでも見うか。
 亭主「それは近ごろかたじけなうござる。大名「さりながら、久しうよまぬによつて、ちと案ぜず
 はなるまい。その内は、つゝとそちらを向いてゐてくれさしめ。亭主「かしまつてござる。大
 名「七本八本。亭主「何ぢや、七本八本。太郎冠者「しい。七重八重でござる。大名「なうな

う、今のはちと違っておりやる。亭主「何とでござる。大名「七重八重、でありやる。亭主「はあ、七重八重。大名「なか／＼。亭主「まづ五つ文字がおもしろいこととでござる。大名「さうであらう。あとはなほおもしろいこととでござる。亭主「早う承りたうござる。大名「おつつけ申さう。九つ時。太郎冠者「しい。九重とこそ思ひしに。大名「今のはざれごととでござる。亭主「はあ、何とでござる。大名「九重とこそ思ひしに、でありやる。亭主「これはだん／＼おもしろうござる。大名「このあとはいよいよ／＼おもしろいこととでござる。亭主「早う承りませう。大名「たゞ今申さう。ばらりと開いた。太郎冠者「十重咲きいづる。大名「や。太郎冠者「十重咲きいづる。(太郎冠者、少し腹を立て、すぐにすねと鼻の先を教へて引きこむなり。)大名「面目もない。また違っておりやる。亭主「さい／＼違ひまするの。大名「今度は十重咲きいづる、でありやる。亭主「十重咲きいづる。大名「なか／＼。亭主「ちと吟じてみませう。大名「や。亭主「吟じてみませう。大名「勝手次第。亭主「七重八重九重とこそ思ひしに、十重咲きいづる。これはことのほかおもしろうござる。あとを承りたうござる。大名「このあとはなほ／＼おもしろいこととでござる。たゞ今申さう。いや、太郎冠者が見えぬ。太郎冠者、太郎冠者。亭主「まうしまし、どれへおいでなさるるぞ。大名「太郎冠者が見えぬ。亭主「歌に太郎冠者がいるものでござるか。早う今のあとを仰せられい。大名「はて、いるやらいらぬやらそなたが知つて。太郎冠者、太郎冠者。亭主「さりとては歌に太郎冠者がいるものでござるか。ひらに今のあとを仰せられい。大名「む、今のあとはあまりおもしろうもおりない。聞かずともおかしめ。亭主「おもしろうないというて、歌のあとが聞かずにおかれませうか。せひとも仰せられい。大名「それならば宿からい

うておこさう。亭主「そのやうなことがあるものでござるか。ひらに今のあとを仰せられいと申すに。大名「そのあとは七重八重でありやる。亭主「それは五つ文字で、合点でござる。そのあとは。大名「そのあとは、九重とこそ思ひしに、であつた。亭主「そのあとは。大名「はて、十重咲きいづる、でありやる。亭主「それでは字が足りませぬ。大名「足らずは足らぬと、とうおしやらいで。足しておまさうものを。亭主「何と。大名「十重咲きいづると足るほどおしやれ。亭主「こゝな人は、身どもをおなぶりやるか。それでは字が短いと申すに。大名「短くは短いとおしやらいで。長うしておまさうものを。亭主「何と。大名「十重咲きいづる(引く)といつまでなりとも引かしめ。亭主「やあら、こなたはいよいよ／＼身どもをなぶるとみえた。その十重咲きいづるのあとをおしやらぬと、あとへも先へもやることではないぞ。大名「はあ、今思ひ出した。亭主「何と。大名「ものと。亭主「何と。大名「ものと。亭主「何と。大名「十重咲きいづる。亭主「十重咲きいづる。大名「太郎冠者がむかうぞね。亭主「あのやくたいなし。とつととお行きやれ。大名「面目もおりない。

(能狂言)

研究

- 一 最初のところで、「心が屈してあしい」ということは二度くり返している。同様な例をさがしてみよ。
- 二 こういう言い方は、目で読む場合にはくどく

三文を解くかき

- 感じられるが、人の読むのを聞いた場合にはどうか。実際にためしてみよう。
- 三 大名の行動で、こつけいに思われるところを指摘せよ。

四 八十ページ終行より八十一ページ五行までを口語になおせ。

五 句読点や音の高低などに注意しながら、朗読してみよ。次にこれに伴なう動作・表情をくふうして、これを三人で演じてみよ。

六 「出う」という未然形や、「見盡くいた」^カ「かうで」などの音便形などは、現在の標準語とは違った言い方であるが、文の中から同じ種類の例をほかにさがしてみよ。

四 文化と自然

現代の人々は、すぐれた文化に恵まれている。文化に親しんでその本質を知ることが、われ／＼の心を豊かにし、教養を高めるばかりでなく、われ／＼の双肩にかゝっている新しい文化の建設のためにも、欠くことのできないものである。

「ローマの秋」は古代文化の中心地であったローマに滞在した筆者の見聞を語り、「学者の苦心」は、文化を生み出す人の努力と、その意義とを教えてくれる。「映画の歴史」を通して、今日の貴重な文化財である映画への理解と親しみを深めよう。「文化と自然」により、文化をそれと対立する自然に比較して、その本質をきわめるようにしたい。

文化は多種多様であって、限られた紙面ではあげ盡くすることができない。われ／＼はもっと深く深く文化を理解し、われ／＼の生活を豊かにするとともに、よりすぐれた文化の建設に努めようではないか。

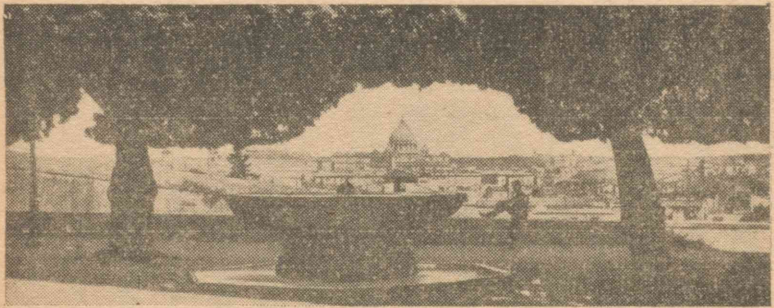
〔一〕 ローマの秋

大類 伸

私がローマにいたのは、もはや二十四、五年の昔となつてしまつたが、秋が来てくりの実が町の市場などに出るころになると、ローマの秋を思い出すのが常である。ローマの町では大道の露店でよくくりを賣っていた。十月になるとローマでは夜は相当に冷える。そのうすら寒い石敷きの町をこつこつと音を立てながら、焼きぐりの紙袋をかゝえて、口をもぐ／＼やつて歩いたこともたび／＼あった。

この町にはくりのほかにかきもあつた。もとより日本内地でいたる所赤く熟したかきの実が見られるような秋景色を、イタリアの場合に望むことは不可能であるが、それでも町を歩いていて店先に赤いかきの実を見いだすと、なんだか急に故國の秋が思い出されてならなかつた。それほどローマの町ではかきは珍しいのであつた。くりはカスターニアという名で呼ばれているが、かきは日本語そのまゝのカキである。二十数年後の今日、イタリアでもかきは多く見られるようになったことと思うが、当時はまだそれほど一般化されてはいなかった。たゞピンチオの丘で公園の入り口近くに、一本のあまり大きくないかきの木があつて、それに実がなつていたことを思い出す。このかきの木のあたりからは、遠くサンピエトロの大寺の大円蓋を望むことができ、ローマ市内の美しいながめの一つであつた。特に夕日がその大円蓋の近くに沈むころのながめは、今でも忘れられない思い出となつている。かきの実からはサンピエトロの大寺が思い出の種となるが、くりの実からは何が思い出されるか、しいていえばツスコロの山である。ツスコロはローマの郊外をめぐる低い山の一つで、山の中腹には

ピンチオの丘



りっぱなフラスカーティの町があり、山上にはツスコロの山荘の跡などがある。その山荘は古代ローマの名士キケロの住んだ跡として有名である。ちょうどくりの実の落ちるころ、十月の末ごろに当時京都大学の先生であった坂口博士が、ローマに來られたが、くりで思い出されるのはその当時のことである。坂口博士のローマ來訪を機会として、当時の落合大使がツスコロ方面のピクニックを企てられ、私もまたその連中に加えられて、晴れた秋の一日を楽しくローマ郊外のピクニックに送ったのであった。ツスコロの山はまばらな林におゝわれて、くりの木が多く、山道を歩くと落ちぐりの実があちこちに散っていた。博士もまたその落ちぐりに興を起されたものと見え、その一つ二つを記念として故國に持ち帰られた様子であった。さればこそ、博士は歸國されてまもなく、ローマ滞在の思い出を京大の雑誌に書かれたが、その小編には「落ちぐり」という題がつけられていた。歸國してから数年の後、不幸にして博士は、この世を去られたが、その追悼の記事を京大の雑誌から求められた時、私は自分の小編の題を「ツスコロの落ちぐり」とつけたのであった。それほど、くりとローマと坂口博士との連想は、私にとって緊密なものとなっている。そのツスコロ行きの日、私もまた落ちぐりの二つ三つをポケットに入れて來たが、そのくりの実は、はなはだしくしなびてしまった

けれども、私といっしょに無事に故國にたどり着いた。

帰ってまもなく、そのくりはなくなつたが、秋になると、ローマの思い出は絶えずくり返される。ツスコロの山は静かな山である。山への登り道はまばらな林の間を通っているが、人ひとりが通れるほどの狭い道で、その道に牛が一匹いたため、それを避けるのにちょっと困ったことがあった。それは坂口博士に同伴した時のことではなく、その後私がひとりでツスコロに登った時の話である。山上には古代ローマの劇場の跡があり、石敷きの階段が半円形となって残っていた。キケロの山荘跡というのは、石やれんがの壁が全くの廢墟となつて残っているにすぎないので、遺跡として取り立てていふほどのこともないが、歴史の思い出は限りなく浮かんでくる。ツスコロの山上からローマの町は遠くかすんでよく見えないけれども、カンバニアの平野を隔てて、「永久の都」のあたり、黒ずんだ空気のけはいに町のありかは推測される。ましてやかのサン・ピエトロ大寺の大円蓋は、日光の關係でその白い屋根がかすかに認められる場合もあるらしい。キケロがこの山荘にこもつた二千年の昔にも、山上からのながめは変わらないことであつたらう。

山を下つてカンバニアの平野を電車に揺られること約一時間、ローマの町に帰れば、再び喧噪のちまたの人となる。いうまでもなく、秋はぶどうの熟する時、九月から十月にかけて、ぶどう採りからぶどうしぼりの好季節で、カンバニアのいなから、ぶどう酒の小だるを積んだほろ馬車が、毎日ローマの町へとはいりこんで來る。朝いなかを出てローマの町で酒だるをさばいた農夫のほろ馬車は、夕方また砂塵の巻き立ついなか道を帰つて行く。多くの農夫は酒に酔つたか、馬車の上で寝ているが、馬はとこ／＼とひとりで車を引いて行く。そのほろ馬車は、ほろや車のながえなどに、きわめてそぼくな絵

がかいてある。多くは簡単な草花模様か、または昔物語の英雄などの姿であるらしい。このような光景は、今から百何十年も以前のローマと変わらないことと思う。それはかのアンデルセンの「即興詩人」に描かれた時代のありさまを思い出させる。そうしてそれはまた、私のローマ滞在からすでに二十余年の今日でも変わらないのではあるまいか。

〔雑誌「別冊文藝春秋」〕

研究

- 一 「永久の都」とはどういう意味か。どこのことか。
- 二 秋のローマには、どんなくたものがあるか。それらが、筆者にどんな感慨を興えたか。
- 三 ローマの古都としてのおもかげは、どこに現われているか。
- 四 世界史のローマ時代を参照して、この文章を讀み返してみよう。

〔二〕学者の苦心

芳賀 矢 一

十年一昔ということを思うと、上田・松井の二君が國語辞書の編纂に着手せられてからも、一昔はとうにすんだ。編纂開始の心祝いというので、知友数名が晩餐会に招かれてうち興じたのは、ついでの間のような氣もするが、そのころはじめて小学校にはいった予が娘は、すでにとついで人の子の母となつてゐる。短いようで長いものである。今や、その第一巻がいよいよ出版になるというおとずれを聞いて、予は初孫の誕生を見た時と同じような、しかもそれよりは大きい一種の喜悅を禁じえないのである。

年の流れは水の流れと同じく、世事の変遷は行く雲のようにきわまりがない。この一昔の間には、いろいろな大事件が起つて、わが日本の國勢を一変せしめた。政治や工業や貿易の進歩発展の跡を見ても、その間の十年は通常の十年ではなかつた。二君の編纂事業は、こういう中に、徐々にその工程を進めていったのである。

鉦山から掘り出されて、えり分けられ鑄分けられてゆく鉦石のように、幾万、幾十万とも知れない古語や新語は、幾百部、幾千部の典籍・圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書き留められ、整理せられる。編集室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められてゆく。一月、二月、三月、四月、秋も暮れ、春も逝いて、暦も幾たびか改まる。同じ仕事が果てしなく、いつまでも続く。はたから見れば、はかのゆかぬことは、はがゆいようで、いつかたのつくことかとおやぶまれるほどであった。編集室は松井君の邸内の離れ家にあつたが、それでも夜半の半鐘に肝を冷やして、よそながら無事を祈つたことも幾たびかわからぬ。二君の筆と頭脳は間断なくこの間に活動して、採るものは採り、捨てるものは捨て、その進歩はおそいが、その成果は確実であつた。かくて、粒々積み上げたいさごもついに山を成すたとえのように、編纂がやゝ緒に ついたまでには、鉄道は何千マイル落成の祝賀会を催したりしたのであつた。

学者の仕事はじみである。めざましく世人を驚かすようなことはない。二君が拮据十余年の編纂事業も、静かな一室に静かに行われたのである。けれども、一たびその室にはいつて、山成す材料を見上げる者は、何人もその難事業たることを承認せずにはいられぬ。また、編纂者の決心と根氣とを尊敬せずにはいられぬ。そうして、それが決して学者の閑事業ではなくして、実は國家的大事業であつ

たことに考えいたらなければならぬ。國民精神の基礎、したがって、國家教育の根底となる國語の調査・整理が、緊急な事業であることはいうまでもない。國家の發展は教育の力によらねばならず、教育の進歩は國語の普及が根本である。狭い編集室に行われて、なんら世人の注意をひかなかつた學者の研究が、実は絶大な國家的事業であつたところに、學者の生命があり、學術の意義があるのである。

十年以前に比べて、鉄道のマイル数の大いに増加したのを祝賀する人は、これと同時に、わが國語界が、十余年後の今日、本書を有するにいたつたことを驚嘆し、慶賀しなければならぬ。文物の整備することは、國家の誇であり、精神界を支配する有力な武器である。完全な一辞書の存在することは、國民にとつての大きな強みである。この一大産物が、堅忍不拔な二君の手によつて成就せられたことは、友人たる予の言い知らぬ喜びを感じざるゆえんである。この十年は、國語界においてもまた無意味な十年ではなかつたのである。

學者の事業は、いつも世間と没交渉のものではない。専心な研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辞典の編纂においては、進歩してゆく世間を、一日もよそに見ているわけにはゆかぬ。十年一昔の間には、國語そのものの中にも、絶えず変遷が行われている。それに注意するだけでも、容易なわざではない。静寂な編集室は、紛糾した実社会と常にあい往來しているのである。

幾多の困難にうちかかつて、國民の覚知せぬ間に、その背後に大きな國家的事業を建設せられた二君の労苦は、いまさら述べるには及ばぬ。後世の人は、必ずこれを、明治時代に企てられて大正時代に完成した大事業の一つに数えるであらう。

予は二君の満足と喜びを察知すると同時に、今か／＼と二君を待ち暮らした同友とともに、まづ二君の成業を祝して、一大白を浮かべようと思ふのである。

(大日本國語辞典序)

研究

- 一 辞書はどういう順序でできるか。この文をもとにして考えてみよ。
- 二 学問は実社会とどんなふうにつながっているか、この國語辞典の場合について考えてみよ。
- 三 文化はわれ／＼の生活にどんな意義を持つてゐるか、みんなで話しあおう。

- 四 これは序文の一つである。序文の内容にはどういうものが必要か、この文章を通して考えてみよ。
- 五 「ペニシリン」「参議院」「共同募金」「配給」などは新語といふことができよう。新語の例をほかに考えてみよ。

〔三〕 映画の歴史

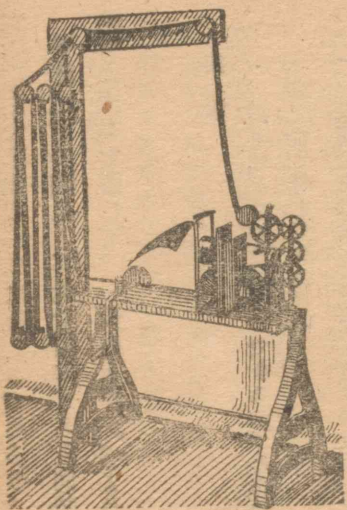
清水 光

トマス・エジソンが一八八九年十月三日にキネトスコープを發明した。こゝに、運動を再現する活寫写真がはじめて完成されたのである。この時、最初に活動写真に寫されたのはエジソンの助手がくしゃみをするところであつたといわれている。このキネトスコープは、一八九三年のシカゴの万国博

覧会に出品されて人々の注意をひいた。ついで翌年四月十三日にいたって、ニューヨークに「キネトスコープ・バーラー」が設立され、やがてその流行は世界じゅうに広がるにいたった。しかし、このキネトスコープは、一度にひとりしか見られぬ「のぞき見」であった。エジソンは当時すでに、この動く写真を多くの人が同時に見られるように、スクリーンに投射することを考えていたのであるが、投射器が千台もあれば世界じゅうの需要を満たし、キネトスコープの商賣がだめになるから、それを発表しなかったのだと伝えられている。

このキネトスコープについて興味があるのは、この最初の活動写真機が蓄音機との結合において考えられていたことである。エジソン自身、「蓄音機が耳に対してなしていることを、目に対してする機械を考え出すことができる。そしてこの両者の結合によって、あらゆる運動と音響を同時に記録し

ヴァイクスコープ



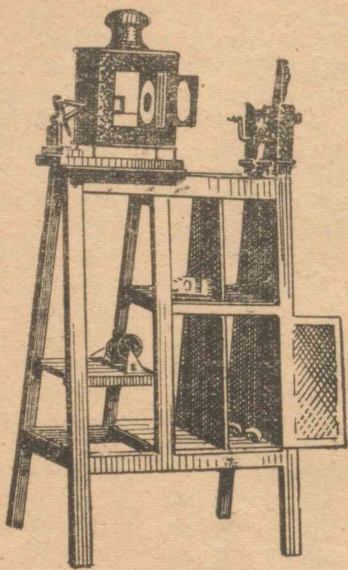
再現することができる。」としるしている。共通の軸に二つの円筒が取りつけてある。その一つには音響がレコードされていて、それを管を通して聞き、一つには、らせん状に細かい写真が巻きつけられていて、それをレンズで拡大してのぞき見るしかけである。この機械は、しかしあまり成功しなかった。そして目で見る活動写真は発声映画の出現まで、別の道を発展していった。

活動写真が、最初にスクリーンに映写されたのは、一八九四年六月六日アメリカのフランシス・J・ゼンキンスが

自宅において「踊り子アナベル」を上映した時であるといわれている。しかし、この映写機はかなり欠点の多いものであった。後にゼンキンスが他の数名と協力して完成したヴァイクスコープは一八九五年の夏に発表されている。ウッドヴィール・レーザムは同じ年の四月にバントプティコンと呼ばれる機械をニューヨークで公開している。

こういうわけであるから、フランスのリュミエール兄弟が一八九五年三月二十二日にリオンの國産奨励会で発表したシネマトグラフが最初の最も完全な活動写真であったといわれうるであろう。それであるから、映画の歴史の書物には、一般に、一八九五年リュミエール兄弟によって活動写真が發明されたとしるされている。リュミエール兄弟のシネマト

シネマトグラフ



グラフは、このことばが活動写真の一般的な名称になったほど完全なそして有名なものである。この機械は同年十二月二十八日、パリのブルヴァール・デーキャビュシーヌのグラン・キャプフェの地下室で、はじめて公開興行的に映写された。

イギリスではエドワード・ホルが、一八九五年二月に活動写真のスクリーン映写を実験的に完成し、翌年二月にシアトログラフと名づけてロ

ンドンで公開している。

これらの人々は、ある程度までそれ／＼独立に各自の活動写真を完成したのである。このことは十

分に注意されるべきであろう。一般に他の発明が天才的な個人の発明であるのに対して、活動写真は数個の人間が方々で、それもほとんど時を同じくして発明し公表しているのである。活動写真の発明は、いわば時代の要求であった。それであるから、発明家のひとりのポールも言っているように、「活動写真は一個人の発明というよりは、一つの時代の発明」といわれるべきであろう。数世紀にわたる科学的な視覚現象の研究の結果、マイブリッジ・マレーらの努力を経て、この時代が活動写真を発明したのである。

このようにして発明された活動写真は、科学の驚異として驚嘆の目をみはってながめられた。これにいわゆる活動写真時代が始まる。この時代には、写真が動くという、それだけの事実に入々は満足していた。荒れた海に怒濤が打ち寄せて来る。列車が停車場へ到着する。工場の門から労働者の群れが出て来る。それだけで、人は異常な感銘を受け、列車の進み来る勢いに悲鳴を上げ、怒濤の打ち寄せる波動に嘔吐を催す人さえあったほどである。これほど簡單ではなくても、だいたいこれに似た新奇と好奇心による活動写真の時代はかなり続いている。この時代の活動写真は、單なる機械的な発明であり、純然たる技術であつて、まだ藝術とはなんの関係もなかつた。

このような状態が、いつまで続いたかは明確には規定できない。タイムチェンコは、活動写真の発明後約一年半で活動写真時代は終り、舞台藝術の模倣の時代が一八九七年から一九〇八年まで続いたと言っている。しかしこの規定は、活動写真時代の初期をあまりに短く考えすぎており、舞台藝術複製時代をあまりに早くあまりに長く考えすぎている。もっとも、これらの時代はもちろん明確な線をもって区画することのできぬ性質を持っているが、少なくとも舞台複製映画の生まれたのは二十世紀

にはいつてからである。いうまでもなく、この時までの活動写真がことごとく單なる活動写真であつたのではもちろんない。いたずら小僧を追っかける、いわゆる「追っかけもの」は、すでに活動写真の初期から現われている。トリックを主にした幻想的な作品もすでに作られている。そして一九〇三年には、ポーターの有名な「大列車盗賊」が活動写真界に一大センセーションを起している。

この「大列車盗賊」の現われたころから、活動写真はストーリーを持ちはじめた。これまでの活動写真は、いわばエピソードを写してはいたが、ストーリーといえるほど一貫した内容を持っていなかった。「大列車盗賊」は、その内容が、ピストルを持ったギャングが列車を襲い、疾走する列車の屋根の上を賊が歩くという、当時としては驚くべき戦慄的なものであっただけでなく、一貫した筋を持っていてという点からも注目すべき作品である。それで、ある批評家たちは、この活動写真をもって映画の歴史を始めていくくらいである。

しかし、「大列車盗賊」のようなのはむしろ例外であつた。この時代のちびたゞしい作品の大部分は、動く写真の新奇さによつてはニューズリナーのある事件を再現し、有名な土地の風光を写し、率直なこっけいによつて安價な笑いを求めた。この活動写真時代の作品は、舞台藝術の再現というよりは、寄席（ミュージックホール）の焼きなおしが主であつた。そして、それが上映されるのも寄席のプログラムの一部分としてであるとか、場末の倉庫や小屋を改造した五セントの白銅一枚ではない「ニッケルオデオン」であつた。たゞ、こゝに注意すべきことは、活動写真が自分のしかたにおいて次第に筋を持ち、話を物語ることができはじめたということである。こゝから文藝作品の物語をくり返す文藝映画や、舞台藝術を再現する映画劇が作られる傾向も生まれてきたのである。しかし、

何よりも、このようにして活動写真の内容が豊富になった。そして、その内容についても單なる思いつき以上に、いろ／＼と考えられるにいたった。

かくて活動写真は單なる技術から、次第に藝術としての映画へと進んでいったのである。

(写真と映画)

研究

- 一 「キネトスコープ」と「シネマトグラフ」との違いを言え。
- 二 映画は、一個人の発明というよりも、一つの時代の発明であるといわれるが、それはなぜか。
- 三 自分の見たうちで、一番印象の強かった映画について、そのストーリーを書け。

- 四 映画と絵画とは、どちらも目で見る藝術であるが、違う点を考えてみよ。
- 五 「マツチ」「インキ」などは外國語のまゝで使うが、「映画・活動写真」は外國語の翻譯である。この二種類の例をあげてみよ。

〔四〕文化と自然

安倍能成

自然と文化との対立

文化というものが人間生活の最も根本的、本質的なものであることは言いうると思うが、そういう根本的、本質的なものは、同時に、廣く人間生活に全面的に關連し浸透しているものである。本質的であると同時に非常に複雑なものである。そういうものを定義することはなか／＼困難である。一休すべてのことやものを考える時には、対立するものと比較してみるとわかりやすい。

そこで文化に対立するものは何かといえ、すなわち自然である。したがって自然と文化とを比べて話せば、おのずから文化というものの性質がわかつてくると思う。自然という漢字は、訓ずれば、「おのずからしかり」となる。だれがそうするということもなしに、ひとりでいろ／＼な現象が起つてきている。それをまず自然といっている。「辞源」という漢字辞典を見ると「勉強せざるなり」と書いてある。われ／＼が特に意志を働かして、これから勉強しようと思わなければ勉強はできない。つまり意識をし、意欲を動かしてはじめてできることであり、くたびれて休息し、眠れば寝る——勉強しない——これが自然である。これが勉強せざる姿だというわけである。

そういう自然に対して、人間の文化というものが、人間の意識を働かして、できたものであることは争われない。

昔中國に荀子^{じゆん}という人がいたが、その荀子のことばの中に、「礼は偽なり。」というのがある。今いう礼儀もこの礼の中にはいつてはいるが、儒教^{じゆ}における「礼」は非常に廣い意味を持っており、あらゆる生活様式すなわち法律・道德・風俗・習慣等をもこめて、礼といっている。孔子は、周代の文化を理想としているが、周の文化の精髓は、孔子によって「礼」にあると考えられていたといっている。だから簡單直截^{じやく}に今の語でいえば、「礼は偽なり。」という句は「文化は人爲なり。」となつてくる。「偽」という字を解剖すれば「人爲」である。うそはつくりごとだから人爲の一つに相違ない、しかし、こゝにいう「偽り」とは、自然から興えられたものでなく、人間がつくつたもの、すなわち人間が意識を働かしてはじめてできるものである。

まずそれを簡單な例で言ってみよう。ごく野蛮の時代にも、人間は水を飲むという必要は感じたが、

そのために特に設備をするということとはなかった。そこらあたりの谷川から、行きあたりばったりに水を飲んでた。よし雨が降って水が濁っても、おそろくその時代の人間は、平気でそういう水を飲んで腹を痛めなかつただろう。濁った水を飲むのがいやなら、三日や四日水を飲まぬくらいのことかできたかもしれない。それで水を飲むという要求も、特別に人間の意志や意識を働かすことなく満たされておつた。しかし、人間がだん／＼発達してくると、濁った水を飲むのはいやだ、というふうになる。雨の降った時には濁った水しか飲めない、あるいはひでりが続くと、水を飲もうにも水がない。そうになると、たゞ行きあたりばったりでは、水を飲むという人間の自然的な要求を満たすわけにいかない。そこではじめて、おれは水を飲む必要があるということ意識するようになり、その意識によって、水を飲みたいという意志が自覚的に起つてきて、その意志を満たすための手段をいろいろ考えることになる。はじめは、石でせいた水たまりのようなものを造つて、ひでりがあつても水がかれにくい、簡単な設備をするかもしれない。しかし、それが進んで井戸を掘るということになれば、雨が降つても濁らない、ひでりが続いてもなか／＼かれない。かくして、自然の與えてくれた条件を征服して、人間が水を飲むという要求を満たすことができる。これはごく簡単ではあるが、人爲ということの原型であつて、すでに文化的活動のはじまりがそこにあるといつていい。ところが井戸を掘つても水が出ない土地があり、水が出てもしその水がよくない所がある。「永遠の都」とよばれる世界的都市ローマは、水がよくない水の便の悪い所である。ローマの都へ行つてみると、今でも、ところどころ町の四つ辻などに泉があつて、引かれて来た水が流れ出ている。二千余年前のローマにすでに水道があつて、その雄大な規模は今なお残つている。ローマではいい水が飲めない。あるいは水の便が乏

しい。これが自然の状態、人間に與えられた状態である。この與えられた状態をどうしようという意力も知力もなかつたなら、水を飲まないでいなければならぬ。すなわち、七つの丘の上にあゝいう大きな都市を築くことはできなかつたであろう。それをよそからきれいな水を引いて来て、この自然の與えた條件を打破することになれば、そこに人間の文化的意欲が、力強くまた大規模に組織的に実現されてくる。たゞ個人個人が水を飲むばかりでなく、都民全体が飲む。全体が飲むためにはある水源池から水を引いて来て、それを系統的に分けねばならない。かくて、ローマに昔から水道が開けていたことは、ローマ人に文化しかも強大な文化があつたという一つの証拠である。そういうふうにして人間の欲望は発達してきて、自然の與えてくれた條件に満足せず、それを克服して、人間の注文通りにしてゆこうとする。それが更に複雑になってくると、たとえば夜中にのどがかわいた時、井戸ばたに行つてつるべでくんで飲むというのはおつ／＼である。寒夜などはことにそうである。そこで、へやにいたまゝで寒いめをしないで水を飲みたいという注文が出てくると、水道の管をへやの中へ引いて、ちよつとねじをまわして、いながらにして、水を飲むことになる。こういうふうに、だん／＼と與えられた状態から遠ざかるような、あるいは與えられた状態を変化するような設備が、人間の意欲の発達または細化に應じて作られるということになる。これが文化であつて、この水道などは、まづ人間の物的要求を満たすところの施設であるが、それを満たすために人間の精神的能力が要求せられ、それを満たすことによつていろいろ／＼な精神的結果が生ずることはいうまでもない。

文化は人爲であり、廣い意味での文化はいつさいの人爲を包括するが、しかし、われ／＼が普通文化といつているのは、人爲の中でも最も本質的なものは恒久的なものをいつているのである。人爲

といつても種々雑多であつて、その場その場の要求を満たすものも人爲に相違ない。しかしこういう一時的もしくは偶然的な要求およびその満足は、人爲であつても、人爲という意味は浅く、自然依存的、本能的な要素が多い。文化の中には普通常識的に、宗教・道徳・学問、あるいは藝術・学藝などが数えられている。それはこれらが文化の本質的な恒久的な要素をなすものと考えられているからである。それは、これらのものが人間の最も深い個人的な要求に根ざすとともに、普遍的な人間の要求に通ずるものであり、時代により民族によって変遷と相違とはありながら、更にそれを超越するものを含んでいるということ、それが單に自然に依存し、自然のままに浮動するものでなくて、根強く人間のものになつていくことを意味している。こういうものは、人爲の中でも、最も深く個人に根ざすとともに、最も多く社会的意義を有し、民族と時代によって特殊性を發揮するとともに、あまねく人類に通ずるものである。これは宗教の有する個人性・人格性とその社会性とを考へても、また道徳が個人の良心を離れては意義を失ふとともに、社会的關係、社会秩序の結核ちゆうかくであることを考へても理解されるであろう。学問が、ニュートンの天才的發見にとゞまらずして、組織と体系とを備えねばならぬのも、そのためであり、最も個性を重んずる藝術でさえも、そのすぐれたものがみな、時代や民族の類型を形づくるのもそれである。文化はかくて個人に根ざして社会に廣がり、主觀を通じて客觀化され、發見や發明を越えて体系化される。そして單なる自然の支配を離れて確實に人間の恒久的所有となり、個人に生きがいをおぼえさすとともに、社会の存続と發展とを命づける。

そういうふうな文化は人間が自然に依存したまへでは、いつまでたつても生じるものではない。鳥や獸には文化はない。みつばちなどは、一種の社会組織みたいな團體生活を形づくつて、人間を感心

させるようなことがあるが、それは自然から與えられた本能以上に出てはいない。したがつて、そういう生活は反復だけで發展がなく、そういうものは文化とはいえない。文化には意欲が加わる。いろいろな環境に従つて、いろ／＼な要求を出し、したがつてまた新たな環境をつくり出すのである。エマソンは、われ／＼人間の生活は單なる反復ではいけない、發展でなければならぬという意味のことを言っている。これは結局、人間の生活が文化的生活であることを意味するものである。

かくして人間がある程度自然から離れるとか、自然以上に出るということでは、文化は生じないということは肯定されてよろ。

文化の自然への依存

ところが人間が全然自然から離れきつた場合、はたして文化は生じるかというところ、これに対しては否定的な答を與えるほかはない。私がこゝに話をしてゐる。それは文化講義といえるであろう。それが文化講義ならば一つの文化活動といつていいと思うが、今私の息が絶えてしまつたとしたら、この文化活動も同時にたちまちだめになる。そうすると私が自然によって呼吸という機能を與えられているということが、私の文化的活動をなすうる根底になつてゐることは否定できない。人爲人爲とはいふが、人爲の根底に自然がある。人間は自然から與えられたものを基盤として、はじめて文化的活動を営むことができるのである。その上人間そのものがやはり自然である。人間が人間を産むといつても、実は自然に生まれたといつてもよいのである。また人間の活動の中には、意志を用いずに自然に與えられるもののない限り、人間の文化的活動・意識的活動は起りようはない。すなわちわれ／＼の中に自然なしには、あるいはわれ／＼が自然であることなしには、われ／＼の文化的活動は一步

も動かさない。同時にわれ／＼が自然から材料を仰ぐことなしには、文化的活動も文化的生産も遂げることはできない。たとえば、講堂は一つの文化的當造物であろう。その當造物の壁にしても、天井にしても、屋根にしても、床にしても、またそこにあるさまざまの設備、机・ガラス窓・電氣にしても、一つとして材料を自然から仰がないものがあるか。自然が材料を供給してくれなければ、人間の文化的な営みは何一つできない。そういう意味でも、文化は自然に依存している。人爲はある程度まで、自然を征服することができる。自然の状態を変換することができる。たとえば、堅固な建築の一室に、適当な保温設備をする。そこを美しく装飾し、山海の珍味を食べ、芳醇な美酒を飲み、よい音楽を聞く。そこでそのへやが、全く周囲の自然と離れた一つの別世界になってくる。戸外では風が吹きすさみ、寒さはきびしいのに、へやの中はまるで春のようである。自然なんかどこにあるという心持になりがらだが、この思いあがった人間世界の中で、自然の活動がなくなつたかといえば決してそうでない。自然の状況が変わっているにすぎない。人間の注文でいろ／＼歪曲されたのを不自然といっているが、これも一種の自然である。寒風の吹きすさむ戸外の世界にも、春のように暖かな室内にも、自然の法則の働いていることに変わりはない。その働く條件が変わらているにすぎない。太陽の光線はまっすぐにさすものだが、壁に当たれば屈折する。そういうふうに、自然の法則は非常に柔軟性を持っていて千変万化する。それを人間は認識しないで、自然を征服したなどとうぬぼれているが、自然の法則は、人間がいかにあがいたところが、それを抹殺するわけにはいかない。だから人間の文化は、自然の法則を抑圧したり無視したりすることはできず、それを違った条件のもとに働かせる以上には出ない。フランシスコベーコンが、自然を征服するためには自然に従順でなければならぬ、と

いう意味のことを言っているが、これは自然を人間の用に供するためには、自然の法則を知つてこれを守らねばならないということである。だから一面からいえば、人間のやる文化的な営みというものも、自然に比べてはかないものだといえる。「國破れて山河あり」ということは、それを語っているといてよからう。しかし人間の文化が自然に及ぼした変化の大を思い、また人間の残した文化の今なお新たであることを考える時、人間の力の大きなことを認めずにはいられぬ。衰亡のギリシアをととう旅客は、ギリシアの自然を見るためでなく、廢墟の中に滅びぬ昔の文化のおもかげに感激せんがためである。人間にとつては、やはり文化あつての自然であろう。結局、自然のまゝでは文化は生まれぬ。しかも自然なしには文化は生まれぬ。この二つの矛盾的關係の間に、文化が生ずるといふわけである。

(雑誌「改造」)

研究

- 一 文化の本質を語るために、作者は、どういう方法を探っているか。
- 二 「人爲」の例として、飲み水から水道への発達をあげているが、これを、燈火について考えてみよう。
- 三 音楽および文学の、個人性と普遍性について話しあおう。

四 文化と自然

- 四 文化と自然とは、どういう關係にあるか。
- 五 文中に、「生じる(サ行上一段)」と「生ずる(サ行変格)」とが、それ／＼幾つ用いられているか。ほかにこうした例はないか。この混用を、どう思うか。
- 六 「学者の苦心」とこの課の文とはどちらも記述文であるのに、読んだ感じはだいぶ違う。こ

の感じの違いを導き出す一つの理由としては、「学者の苦心」では「十年一昔」「とつぐ」「外学校にはいる」などのように昔からの日本語や漢語を使っているが、「文化と自然」では「本質的」「意識」「現象」などのように、漢語であつても明治になつてからの西洋哲学の翻譯語と

しての漢語が多いとか、「主観を通じて客観化され」「社会の存続と発展とを命づけ」などのような翻譯口調の言いまわしが多いことにあると思われる。これら二つの教材についてどういふ点をほかにさがしてみよ。

私たちの國語研究会

- 第一高等学校 教授 市古貞次
- 東京女子高等師範学校 教授 江湖山恒明
- 東京都立第一新制高等学校 教官 佐藤正憲
- 白百合女子専門学校 教授 松下宗彦
- 第七高等学校 教授 松村明
- 千葉師範学校 教授 山本茂男

Approved by Ministry of Education
(Date Oct. 24, 1949)

昭和二十四年七月十九日 発行
昭和二十四年七月十三日 印刷
昭和二十四年十月二十四日 再版
昭和二十四年十月二十八日 再版印刷

私たちの國語 二上

定價 金十九円九十銭

著者 私たちの國語研究会
代表者 市古貞次

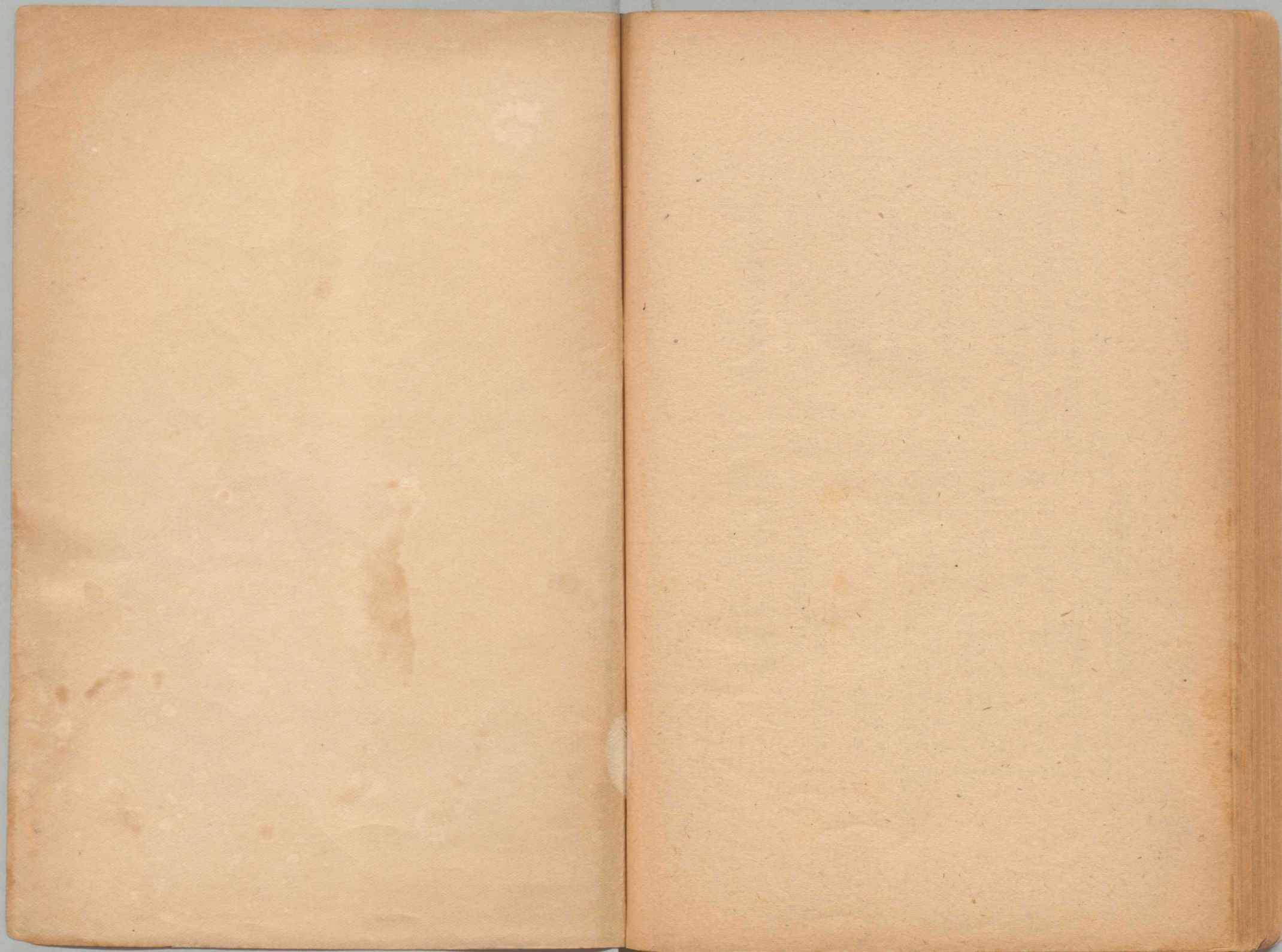
発行者 株式会社秀英出版
代表者 有光次郎

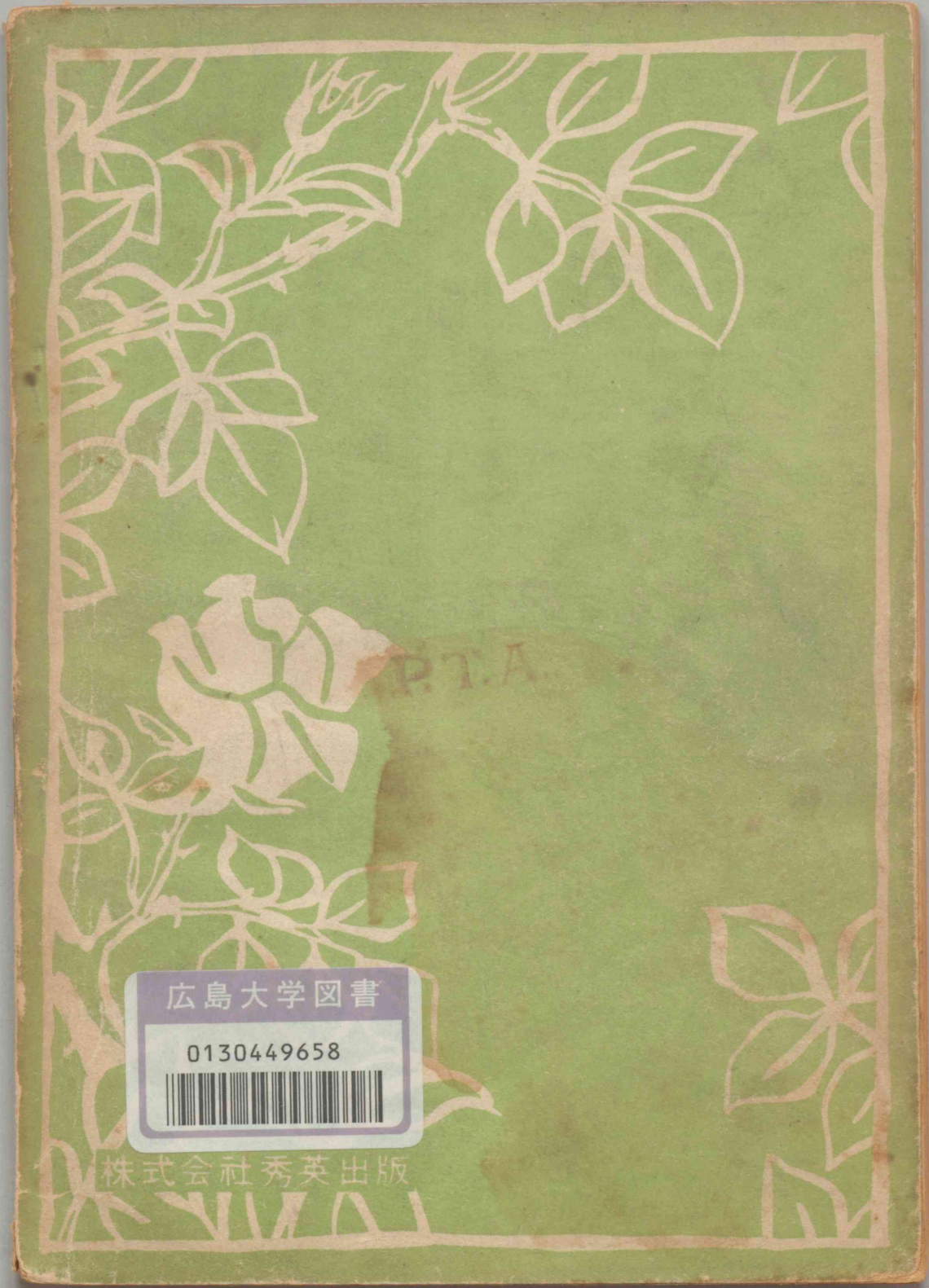
印刷者 大日本印刷株式会社
代表者 佐久間長吉郎

発行所 株式会社秀英出版
東京都中央区銀座七ノ四
電話銀座(57)六八二五番

(中國 813)

出版権登録済 意匠登録出願中





広島大学図書

0130449658



株式会社秀英出版